

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.17
2014.2

関東学院校訓特集
セミナーハウス特集

目次

関東学院大学葉山セミナーハウス全景写真	1
関東学院の源流を探る 清水 武	2
関東学院大学葉山セミナーハウス閉館にあたって	6
葉山セミナーハウスについて	8
関東学院大学葉山セミナーハウス新築工事竣工写真について	10
リンフィールド大学教職員・学生との国際交流の場／編集後記	15
紫苑学園と啓祐学園の思い出	16
キリスト教に基づく校訓「人になれ 奉仕せよ」	18
坂田祐と関東学院の教育	19
校訓「人になれ 奉仕せよ」資料	23
学院史資料展2013	31
学院史資料の紹介／資料・情報提供のお願い	34
ネイサン・ブラウン博士夫妻顕彰板の設置	36



関東学院大学葉山セミナーハウス全景写真〔1980（昭和55）年5月31日竣工時〕

① 葉山セミナーハウス					
鉄筋コンクリート造一部鉄骨鉄筋コンクリート造・地下1階地上2階建					
建築面積	1,752.834㎡				
床面積		本館	A棟	B棟	T
	B I	682.39			682.39
	1	933.40	423.139	487.65	1,744.189
	2	306.389	426.999	492.29	1,225.678
	R F		10.47		10.47
T	1,822.179	860.608	979.94	3,662.727	



正面本館外壁が黒色で塗装された写真

清水 武——(1904-1988)

中学・高等学校 元校長 / 文学部 元教授

戦中・戦後の学院のまとめ役

関東学院大学文学部『紀要』第19号(1976年)「清水武先生古希記念特集」に、清水は「私の略歴」を寄稿している。清水は寡黙で自分のことをあまり語らない人なので、編集者のご自身に執筆を御願ひしたのであろう。

その中で清水は関東学院中学部に赴任したいきさつを書いている。これに基づいて、関東学院に来るまでの経由をたどってみよう。

清水は「昭和14年4月、故、坂田祐先生(当時中学部長)の要請により関東学院中学部の紛争解決のため、教頭として招かれた」という。

日本が急激に軍国主義化した時期のことである。国家権力の介入が教育の現場にもあからさまに見られた。ここに言及された「中学部の紛争」については、今では詳しくはわからないが、この時期に旧制専門学校の社会事業部と神学部が大量逮捕され、やがて学生たちは他の学校に吸収されて、これらの学部が閉鎖された。しかもアメリカ・バプテスト本部からの外国人教師たちが帰国させられ、アメリカからの財政支援も困難になり、中学部の経営もきびしい状態に陥っていた。この時期に清水は中学部教頭として内部を固め、外部からの寒風に耐えるために日夜奮闘した。

戦争が終わって、今度は清水は戦後のインフレの中、焼け跡からの学校再建のために精力を注がねばならなかった。清水は「昭和23年、学制改革に際して、同中学校長となる。・・・同26年4月、同高等学校長を兼任」した。ここでも清水は淡々と履歴のみを記すが、その背後には血のにじむような苦労があったことを推察しなければならない。

戦災からの復興と学制改革後の整備と充実の任務を終えて後に、次に清水は「昭和29年4月—38年10月、学校法人関東学院、財務理事ならびに評議員にえられ、大学運営について、大学当事者と資金の苦労をとみにした」と記している。清水が10年間の長きに渡り、学校法人の財務担当理事を務めたことに敬意を表さなければならない。清水はここでも淡々と自分の履歴を記すが、この約10年間の経営は順風満帆ではなかった。当時の関東学院大学は小規模であり、キャンパスの施設も貧弱であった。教職員の給与も滞りがちであった。しかも今日のような公的助成が確立してはいなかった時期のことである。



戦中・戦後のきびしい時代に、中学部教頭、後に中学・高等学校校長、さらに財務理事をまかされたのは、清水が信頼のおける堅実な人物であったからである。清水はいわば激動の時代の陰の功労者であった。

戦後の窮乏と混乱の時代に、清水は入学式・卒業式・礼拝などの時間における校長としての生徒への講話を大切な使命にしていた。ある教員は清水校長が「歴代校長の中で、もっともすぐれたお話をされた」と述懐したことがある。

生い立ちと前歴

清水は1904(明治37)年10月26日に横浜に生まれた。本籍地は横浜市鶴見区馬場町であった。清水は1919年に中学関東学院第一回生として入学した。清水は初代の学院長であった坂田祐の「人になれ 奉仕せよ」の校訓を直接に聞いたのである。

中学部卒業後、清水は当時は旧制専門学校であった青山学院文科英文科に進学し、1928(昭和3)年3月に同校を卒業した。同年7月にカリフォルニア州バークレー市にあるパシフィック・スクール・オブ・レリジョン(大学院)に留学した。この学校は1866年創立で、その名の通り諸宗教研究に門戸を開いている。今日では周辺の八つの神学大学院とコンソーシアム(連合体)を構成している。アメリカ・バプテスト西部神学大学院(American Baptist Seminary of the West)もこれに加わっている。そこで清水は「バックカム教授の下で、キリスト教倫理学を学び、プラトーン哲学に関心をもつ」に至ったという。ジョン・ライト・バックカム(John Wright Buckham 1841-1945)は1903年からここで教鞭をとっていた。1930年5月に清水はここで「マスター・オブ・アーツ」の学位を取得した。

さらに清水はドイツに赴いて、ベルリン大学で3ヶ月のドイツ語研修を経て、1930年10月にハイデルベ

ルク大学哲学部に正式の学生として入学した。2年後の1932年10月には「カンディダトゥス・フィロソフィエ」(Candidatus Philosophiae ドイツの大学における博士号取得論文提出資格)を取得した。ハイデルベルグ大学では、清水はハインリッヒ・リッケルト(Heinrich Rickert 1863-1936)、エルンスト・ホフマン(Ernst Hoffmann 1880-1952)、ヘルマン・グロックナー(Hermann Glockner 1896-1979)、カール・ヤスパース(Karl Jaspers 1883-1969)、その他の教授たちの指導のもとで学んだ。清水の記述によれば、「組織哲学、ギリシア哲学、ヘーゲル哲学、哲学史、ドイツ文学、古典語などを学習」したという。当時のドイツは第一次大戦後のことで、周辺諸国への賠償問題をかかえており、極度のインフレに苦しんでいた。しかしこの時期には、アメリカや、日本からのお金が有効に活きており、その恩恵に浴して、多くの研究者や、学生がドイツで研究する機会を享受できた。ドイツでの研鑽後、清水はフランス、イタリアを旅して、美術を研究し、翌年、1933年1月に帰国した。

同年12月から広島女学院専門学校(今日の広島女学院大学)教授に就任した。担当科目は英文学およびドイツ語であった。彼は2年3ヶ月の勤務の後、通信省電務局で外国制度の調査を命じられた。この任務を2年2ヶ月つとめた後、清水は1939年4月に関東学院中学部教頭に就任したのである。

研究者として

富田富士雄(関東学院元学院長・文学部元教授)が上掲の『紀要』に「先輩清水武さん」と題してエッセイを寄稿している。そこには清水と富田との結びつきや、清水の思想的背景が紹介されている。清水の哲学論文はとても難解なので、富田の言葉を借りて紹介してみたい。

「清水さんは、・・・旧制の関東学院中学部(清水さんのときは中学関東学院)で、一方は1回生、他方(富田)は6回生だったので、二人は同時に在学したことはなかった。しかし、同じ教会で礼拝に出席したことなどから知りあい、専門はちがっても二人とも学究として進み、母校の関東学院で教えるようになり、最後には文学部に属し、そしていまは、共に定年になっている。このように、少年時代から定年後の現在に至るまで、わたしはなににかにつけ清水さんから教えられてきたのである。

清水さんは哲学、わたしは社会学で専門は違ったが、どちらも清水さんがハイデルベルク大学で師事したリッケルト教授のいう文化科学である。リッケルトの著書『認識の対象』や『文化科学と自然科学』は私も学生時代に読み、また社会学方法論の講義の際などにも、これを取り上げてきたので、清水さんからリッケルトの話に興味深く聞いたことがある。このリッケルト

が、私の最も影響を受けた日本の哲学者三木清のことをほめていたということも面白かった。」

「そして帰国後、まもなくして、クルト・ジンガーと共著の『プラトーンの家像』を訳して三省堂の「ひとと学説」叢書の一冊として出版された。私もこれを読んで、清水さんが、アリストテレスではなく、プラトーンにひかれ、そのためにアメリカからドイツに渡り、それを生涯のテーマとされたことが、清水さんの人柄と結びつけて、わかるような気がしたのであった。

この『プラトーンの家像』の「まえがき」で清水さんは次のように言っている。『プラトーンは東洋的な瞑想の哲人でも、西洋的な体系的な哲学者でもない。神秘によってのみ人間存在の背後を視ようとするものでも、数学者の言葉のみで世界を解明するものでもない。智を愛する者(フィロソフォス)とは思惟を基礎付ける真理、人間の生活に規範を与える所のものを把握する人の謂である。従って、彼は詩人の表現と数学者の言葉を自由に取り交ぜてわれわれに呼びかけている』と。」

クルト・ジンガー(Kurt Singer 1886-1962)はドイツの経済学者・哲学者であった。ハンブルク大学教授であったが、1931年から1935年まで東京大学客員教授、1936年から1939年まで仙台にあった旧制第二高等学校のドイツ語教師を勤めた高名な学者である。清水は在日中のジンガー教授と交流を持ち、共同執筆と翻訳を担当したのであった。ジンガー教授は父親がユダヤ系であったため、ナチス=ドイツと連携を深めた当時の日本政府によって第二高等学校の職を解雇された。その上、反ユダヤ主義政策のドイツに帰国できず、オーストラリアの大学で教えていたが、1962年にギリシアのアテネで客死した。

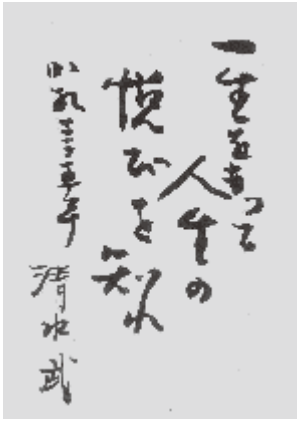
富田によれば、「(清水は)また詩や絵画芸術を愛し、それを通して物を見る人でもある。芸術に対して豊かな感覚をもち、また自分でも絵をかいている」という。ここに清水の自画像を掲載することにした。

ここで富田は、水船六洲について触れている。旧制の関東学院中学部や、関東学院小学校に学んだ者は美術教師の水船を思い出すことであろう。

「関東学院小学校長に日展審査員の水船六洲氏を招き、その芸術家としての理想を小学校教育に自由に発揮させようとしたのも、清水さんの芸術を愛するころのあらわれだったといえよう。」

1952年4月に関東





学院小学校三春台分教室が開設された。1953年3月から関東学院小学校として独立、六浦校地の本校は関東学院六浦小学校と改称した。当時の小学校校長は坂田祐、そのもとで、最初は水船が主事として坂田を補佐した。1961年から1963年まで清水が中学・高等学校長のまま小学校長

を兼務したこともある。水船は1961年9月から1962年6月までアメリカ合衆国ヴァーモント州マールボロ・カレッジにおいて版画を指導した後、帰国して小学校長に就任した。この人事は清水が強く推したことによると富田は理解している。

「清水さんは、青山学院の学生時代に、團伊能の美術史をきき、また、その教材の準備を手伝った。これが清水さんの芸術的感覚・精神を養うのに非常に役立ったとのことである。清水さんはこのように青年時代から芸術を愛していた」とも富田は記す。

團伊能（1892-1973）は東京帝国大学助教授を務めた。美術史学者、実業家、戦後は参議院議員になったこともある。作曲家の團伊玖磨はその長男である。清水は青山学院時代にこのような超大物に出会い、大きな影響を受けたことになる。

富田はさらに清水の色彩感覚に注目する。

「清水さんが校長をしていた時、校舎の新築や改修に当たって色彩に非常に気を配り苦心したことを聞かされて、私は校長としてそんな細かいことに気を配らなくてもよさそうに思ったが、清水さんの芸術的感覚にはそれが見逃せられなかったのであろう。」

清水はヤスパースの講義を熱心に聴講したという。これについても、富田は清水から興味ある情報を聞いている。

「清水さんがハイデルベルクで師事したのは、前にも述べたようにリッケルトであったが、それよりも一層関心をもって熱心にきいた講義はヤスパースのそれであったとのことである。ヤスパースは、当時は日本では未だそれほど知られていなかった。清水さんの話によれば、リッケルトは、ヤスパースをあまり高く評価していなかったのである。ヤスパースは日本でもその後、実存主義の代表的哲学者として非常に有名になり、その著書は多く翻訳されて読まれている。清水さんがその時聴いたヤスパースの講義は、後に『現代の精神的状況』として出版されたものである。」（この原著ドイツ語版は1931年、邦訳は飯島宗享訳により1971年に理想社から出版された。）

富田はこう付け加える。「ヤスパースがその哲学的立場から、現代の機械文明や、大衆社会的状況等を論じた講義が、清水さんに深い感銘を与えたということは、清水さんが、哲学者として現代の歴史的動向に対して常に鋭い洞察をするひとであることと結びついているように、私には思われる。」

清水はアメリカでは1929年の大恐慌のために、失業者が町にあふれる悲惨な状況を目撃した。次にドイツでは第一次大戦後の言語に絶する混乱とナチズムの軍靴の音が近寄ってくるのをひしひしと感じて、帰国した。そして日本においてファシズムと軍国主義が跋扈する時代に、彼自身が若者を教育するという困難な役割をになうことになった。

富田は清水が『プラトンの国家像』改訂版（1943年）の結論の章に書いた言葉に注目している。

「その結論の章は、清水さんが書いたものだが、私はそこに次のような言葉をみた。『自己にゆずられた遺産を、常に新しく、永遠に若き誇りをもって保ってゆく為には、その価値あるものを新しき時代の火に投じて浄化しなければならない。』（228ページ）また『伝統とは創造を続けることであって、古きものをそのまま持続するというのではない・・・昨日の創造は今日の伝統であり、今日の創造は明日への伝統となる。過去を創り、現在を創り、未来を創るのが真の伝統である。最も重要なことは生命を失わないことである。』（232ページ）」

清水は枯渇し、化石となった伝統の継承でなく、新しい生命にみちた創造的伝統の継承を目指したのであった。

富田は清水の教育者としての対話と寛容の姿勢についても注目して、こう述べている。

「清水さんはプラトンの学徒らしく、対話を好み、対話の人であった。これは教育者に必要なことであろう。清水さんが学生とも対話をした。これは大学紛争のときでもそうであった。自分は平均点で学生をみない、と清水さんは言った。学生ひとりひとりの特質をみて話しあうのである。これが教育だろうと私は思った。」

富田は清水の中に哲学者の冷静さと達観を見出している。

「清水さんは、いつも静かに語りかけてきたが、多くの場合、きわめて痛烈な、時にはそれは皮肉とも感じられた。しかし、そのなかにも温かさはいつもあった。私は清水さんと話しあって、反論したときでも、いつも爽やかな感じをもったものである。」

筆者も清水の講義を受けたことがある。大学院の授業で、3人だけの受講生であった。ドイツの哲学者、インマヌエル・カント（1724-1804）の著作を学生に読ませて、それについて丁寧なコメントをしてきていた

ことを覚えている。一度、立派な西洋館のお宅に招待されて、しかも決して食べるのできないような高級なフランス料理のコースをごちそうになった。確かに清水は学生たちを紳士として扱ってくれていたのがあった。

「人格の発見こそ、現代の課題である」

これは1955年3月1日に行われた関東学院高等学校の卒業式における清水の式辞タイトルである。清水自身が語るころの、時代を洞察して若者を鼓舞して止まない、格調高い、貴重な文章に触れていただきたい。しかもこれは3.11の「フクシマ」の影を背負う私たちに語りかけていることにもなる警鐘として注目したい。

「本日ここに関東学院高等学校第七回卒業式をあげ、二三六名の希望に溢れた諸子をこの丘の上より送るにあたって、私の考えの一端を述べ、諸子の卒業を祝う言葉といたします。

諸子は一九四九年（昭和二四年）四月、中学生として入学、それ以来、六ヶ年の年月をひたすら学業にいそしみ、今日の栄えある日を迎えました、それは第二次世界大戦の後始末の時代でありました。

人類の思想が大きくゆらぎ、国民の経済が不安定の状態に置かれ、政治思想の対立が原子爆弾という現代の魔法の杖によって更に激しくなり、一つの国家の集団は、今ひとつのその集団と相対しながら、平和を保たなければならないという時代でありました。

人類は平和を実現するために、最も非人道的な手段を常に用意しています。一個の水素爆弾は七千キロ平方に存在するあらゆる生命を一瞬の瞬間に奪うことが可能になりました。

私はこのような時代が文化的であるとみなすことが出来ません。脅迫観念によって、人間はみずからのつくり出す黒い影におびえています。こうした政治的不安と恐怖の感情こそ現代の象徴であり、われわれはこのような世界に在ることを否定することはできません。しかしまた、このような世界を成り行くままに眺めている傍観者の立場にみずからを置いて満足すべきではありません。われわれの使命は、現代という時を批判することではなく、それを正しい角度に向きを変えることでなければなりません。批評家となることではなく実行者となることこそ、若い世代の誇りでなければなりません。

産業革命は古い封建時代の生産の方法に大きな刺激をあたえて、新しい市民社会を形成することによって、人間の歴史においては一つの偉大な飛躍の時代を実現しました。人々はこのことが人類の社会をより幸福にするであろうと予想したのですが、それは人間精神の革命を成し遂げる事が出来ませんでした。

機械の力、原子のエネルギーはわれわれが身近に経

験したように、その力を発見した人類に向かって破滅の戦いをいどんでいます。今日の世界は『生きながらえるか、滅びるか』という二つの分かれ道に置かれています。

人間の精神的な歩みが如何に遅く、かつその目標が明らかに示されていないかは、今日の世界のあらゆる出来事によって知ることが出来ます。六千年前のエジプトの王家に伝えられた道徳観は、今日の社会に何らの修正を要することなく適合します。キリストの言葉は、二千年のときの隔たりを感じさせません。何故に彼らの言葉は現代の良心を鋭く刺すトゲを有しているのでしょうか。

現代の文化は二重の翼をもっているピカソの女人像のごとく、善と悪、青ざめた友情と色彩はなやかな悪魔の仮面を着けています。人格を失ってしまった人間はすぐれた特性を自己のうちに包みながら、自らが作り出した物質のドレイになっています。人格の発見こそ現代社会の最も重要なことであり、明日への課題であります。

『人になれ』ということは、諸子の未来への扉を拓く鍵であります。それはまたすべての人類の在り方に関する問題であります。人間革命の主体は新しい人格の誕生であります。この人格が生まれなかったら、個人の一生はまことに生より死へ至る道であり、人類は己の愚かさを繰り返して、自滅するであります。われわれの人生は機械の部分品のごとく容易に他のものと交換することが出来たり、捨て去ることが出来るものではありません。

われわれの一生は唯一回限りの人生であります。むなししい時の経過として待つことなく、人間をみずからのうちに意識し、生活することが人になることであります。

私は今、この丘を下り、後を振り向くことなく消えて行く諸子の姿を思います。大きな希望をいだいて前進をつづけて行く諸子の足音、あるいはまた家庭の設計を夢見つつある諸子のまなざしの輝いているのを見出します。諸子の未来の眺望がどのようなものであったとしても、この丘における六ヶ年の生活が、諸子にとっては永遠に若い熱情の泉となることを期待しています。いかなる運命によっても、ひるむことなく、確固とした意思をたかめ、つねに真理を追い求める力を自己の生活の根本に貯えることを願って止みません。

卒業生諸君、この日が諸子の望みと喜びにみちた人生の第二の出発となることを願い、前途に神の祝福を祈ります。」

関東学院大学葉山セミナーハウス閉館にあたって

—葉山セミナーハウスの初利用者、最多日数宿泊者として—

学院史資料室 事務室長 瀬 沼 達 也



▲1986年度第7回リ大からの交換留学生歓迎会
(中央は藤本一郎学長、右端は鈴木治郎支配人)

大学葉山セミナーハウス（以下「セミナーハウス」と称す）は、1980（昭和55）年5月31日に竣工された。文字どおり大学の少人数教育、研究のための宿泊、研修施設として利用された。大学の教職員、学生だけでなく、学校法人関東学院の役員、幼稚園から高校までの教職員、園児、児童、生徒そして法人事務局の職員も利用した。コミュニティからの参加があった葉山町主催、関東学院大学・大学生涯学習センター・大学人文科学研究所後援の葉山町民大学、外国からの参加もあった関東ポエトリ・センター主催「ポエトリ関東セミナー」等の会場として利用され、地域貢献の一翼も担った。

そのセミナーハウスが、33年間の役割を終え、2013年3月31日付で閉館された。この機会にその存在の記録を『学院史資料室ニュース・レター』に遺すべきと考え、そのNo.17に特集を組んだ。

セミナーハウス施設・備品で後世に遺されるものは、「人になれ 奉仕せよ」と刻まれた礎石、入口の看板、大研修室の壁に埋め込まれていたステンドグラス等

ある。特にステンドグラスは修復され、将来に建設される建造物に設置される予定である。

1980年竣工当時、企画担当常務理事の金子三郎氏から口頭で筆者が聞いたことだが、セミナーハウスに設けられた個室の数は、1976年に米国リンフィールド大学（以下「リ大」と称す）と関東学院大学（以下「KGU」と称す）との間で締結された教育交流協定により定められた交換留学制度の下で来学するリ大生の人数15名を基準にして18室を企画されたという。そしてそのとおりに建設された。リ大とKGUとの学生の交換留学プログラムは、1980年から始まり現在に至っているが、葉山セミナーハウス利用の観点から言えば、1980年から2011年12月まで継続して使われた。当初は、8月～12月の5ヶ月間セミナーハウスで生活した。最大16名、交換留学生だけでも288名が利用した。但し、期間途中に長・短期のホームステイプログラムにより日本人家庭宅で過ごした。また、2005年からは提携した別の大学からの留学生もリ大生とともに利用した。その利用者数は、37名である。この交換プログラム前には約3～4週間の短期研修で来学した学生と引率教員もあり、冬期にJapan Study Tour（集中講義）により1回に15名程度のリ大生と引率者1名がセミナーハウスを利用したことも数回あった。

関東学院法人事務局施設部に保管されていたセミナーハウスの図面および竣工当時の写真の一部を掲載する。

キリスト教教育の特色として挙げられるのは、一人ひとりを名前をもって覚え、大切に教育である。その延長線上に少人数教育がある。そのシンボルはセミナー教育であると思う。その意味で、葉山セミナーハウスは、キリスト教の精神を建学の精神とする本学院の教育にとって重要な役割を果たしたと言える。

今号には紙幅の都合ですべてを記すことはできない。そこで次の三つのことを記述して記録に留めたい。

関東学院大学葉山セミナーハウス役職者一覧

No.	氏名	部署名	役職名	任期（西暦）年月日	備考
1	鈴木 治郎	葉山セミナーハウス	支配人	1980年4月1日～1989年3月31日	
2	上川 信雄	葉山セミナーハウス	司厨士長	1980年10月1日～1993年3月31日	
3	林 和利	葉山セミナーハウス運営課	課長	1989年4月1日～1991年10月31日	1988年10月1日～1989年3月31日 葉山セミナーハウス支配人補佐（課長代理）
4	小林 徳平	葉山セミナーハウス	館長	1991年4月1日～1994年3月31日	
5	北村 亘	葉山セミナーハウス運営課	課長代理	1991年11月1日～1994年3月31日	
6	野呂 聖希	葉山セミナーハウス	司厨士長	1993年4月1日～2002年3月31日	
7	前田 敏	葉山セミナーハウス	館長	1994年4月1日～1996年3月31日	課長兼務
8	高嶋 八郎	葉山セミナーハウス運営課	課長	1996年4月1日～2005年3月31日	
9	大野 功一	葉山セミナーハウス	館長	2003年6月1日～2005年12月18日	
10	林 和利	葉山セミナーハウス運営課	大学長付 (葉山セミナーハウス運営課担当)	2005年4月1日～2007年3月31日	
11	松井 和則	葉山セミナーハウス	館長	2006年6月1日～2009年12月18日	
12	林 和利	葉山セミナーハウス運営課	主幹 (葉山セミナーハウス運営課)	2007年4月1日～2008年3月31日	
13	石田 武雄	葉山セミナーハウス	事務次長 (葉山セミナーハウス運営課担当)	2008年4月1日～2010年3月31日	課長兼務
14	大野 功一	葉山セミナーハウス	館長	2010年4月1日～2013年12月18日	
15	石田 武雄	葉山セミナーハウス	主幹(葉山セミナーハウス)	2010年4月1日～2011年3月31日	
16	石田 武雄	葉山セミナーハウス運営課	課長	2011年4月1日～2013年3月31日	

まず、歴代のセミナーハウス役職者である。下記一覧のとおり合計16名(延べ数)が務めた。この役職者のほかに氏名こそ記さないが、一般職の職員、司厨士、臨時職員、ボイラーマン、守衛の方々がそれぞれの役割を果たされた。それらの方々が忠実に働いたからこそ33年間の長きに亘って開館することができたのである。この場を借りて心から感謝の意を表したい。

初めての利用者、最多日数の宿泊者

セミナーハウスの竣工日は、1980(昭和55)年5月31日である。が、工事の関係でその開館は予定より1週間遅れた。そのため関東学院大学の姉妹校のり大からの教職員交流で来日した7名の来賓は、その遅れた1週間、京浜急行黄金町駅近くにある東亜ホテル(現在のHOTEL MYSTAYS Yokohama)に宿泊すること



▲1986年夏、セミナー室での日本語授業風景

になった。そしてセミナーハウスの開館を待って、この方々がセミナーハウスを利用したのである。つまりこの7名が初めての泊り客となった。David Hansen(デイビッド・ハンセン)先生夫妻他、教員3名とその配偶者2名、計7名であった。当時、国際センター運営課所属の筆者が引率者・世話人として全期間同泊した。来賓7名はB棟ユニットバス付き和室に、筆者はA棟個室に宿泊した。来賓は青畳の香りがする新築の和室に3週間ではあるが、住むことになった。その間、京都と日光等にも出かけたので、全期間宿泊した訳ではない。筆者は、来賓の滞在中の全期間、添乗員の役割を担った。旅行代理店に勤めたような錯覚を感じた。短いとは言え、寝食を共にすると家族のような関係となる。特に7名の方々は挨拶程度の日本語力しかなかったため、通訳者も務めた。帰米後、Hansen教授は、り大の学生生活部長、副学長を歴任された。奥様も講師として教鞭をとられた。現在も筆者はお二人と交流している。他の方々は帰米後に召天されたり、他大学へ移籍されたため、交流は続かなかった。

ノーベル文学賞詩人や谷川俊太郎氏も参加した関東ポエトリ・セミナーの会場として

セミナーハウスは、主に学院内、特に大学の教職員、学生対象の催し物会場として利用された。ここでは、学外からも注目され、NHKの取材も入った催し物を記録に留めたい。

まず、その主催組織である関東ポエトリ・センターは、1968年に本学教授William I. Elliott氏の提唱により、米国バプテスト同盟の財政的援助を得て、関東学院大学の文学部を母体として発足した。1970年の第2回夏期セミナーのあと暫く活動が停止していたが、1984年に大学からの援助を得て復活した。その復活第1回からその会場としてセミナーハウスが利用されることになった。

1987年にセミナーハウスで開催された第6回夏期セ

ミナーにはSeamus Heaney(シェイマス・ヒーニー)氏が、同センターの招きで初来日した。ヒーニー氏は、北アイルランド出身の詩人で、当時ハーバード大学教授であった。この夏期セミナーで同氏は自作の詩を朗読し、“The Sound of Poetry”と題する講演も行った。その8年後の1995年にはノーベル文学賞を受賞している。

日本を代表する詩人である谷川俊太郎氏もこの夏期セミナーに参加しただけでなく、同センターのコンサルタントを務めて下さった。

講演、朗読はセミナーハウスの大研修室で、セミナーは小研修室で行われた。

筆者も2002年8月2日から4日にセミナーハウスで開催された関東ポエトリ・センター主催第18回夏期セミナーに参加し、自作朗読された詩人の生の声を聞いたとき、文字として読む詩との印象の相違に驚かされた記憶がある。自由時間にロビーで谷川俊太郎氏に筆者が「心」と「こころ」の表現の違いについて直接質問したことも記憶に新しい。

同年の夏期セミナーに講演講師、セミナー講師、自作朗読講師等で参加した方々の氏名だけ挙げる。大岡信氏、荒川洋治氏、中野重治氏、アーサー・ビナード氏、王新新氏、ハリ・ゲスト氏、小池昌代氏、友部正人氏ほか著名な詩人・作家である。つまり、今までにノーベル文学賞受賞者を初め国内外の著名な詩人・作家が、セミナーハウスを利用したことになる。

長期宿泊、継続期間利用の学生団体

長期に宿泊したのは関東学院大学ヨット部である。夏期に主に大広間を利用した。セミナーハウスの海に近い立地がその理由である。

関東学院大学・関東学院女子短期大学シェイクスピア英語劇も大学葉山セミナーハウスが竣工されてからは、5月と11月に泊りがけで合宿等を毎年行った。それまでは外部の宿泊施設を利用していた。11月の合宿として利用は、最終年度の2012年まで続いた。

多くの学生、生徒にとって教室での思い出は、それほど残らないものである。しかし日常と異なる合宿や旅行の思い出は心に刻まれているものである。セミナーハウスを長期間、数多く利用した学生、生徒にとって思い出深い場所としてこのセミナーハウスがあると思う。

結びに

筆者の個人的なことで恐縮だが、1984年4月29日にセミナーハウスの大会議室で筆者は結婚式を挙げ、大広間で披露宴を催し、A棟和室に宿泊した。

当時、結婚式の説教と披露宴の主賓挨拶をしてくださった学院長の柳生直行先生、司式の関東学院教会牧師の加納政弘先生(元関東学院大学神学部教員)、企画担当常務理事の金子三郎先生、国際センター所長の加藤俊作(文学部教授)先生、国際センター運営課長の伊藤孝一氏を初め多くの関東学院教職員、学生も親族とともに列席して下さった。セミナーハウスでの結婚式は、これが初めてであったと聞いた。最も大きな思い出となったのは当然筆者ではあるが、多くの人々の心に残る思い出であつたらと願う。

このたびセミナーハウス閉館に伴い建物が取壊され、また一つ思い出の場所が消えるのは誠に残念なことである。が、しかし、そこでの良き思い出は、いつまでも心に残る。セミナーハウスの初めての利用者であり、最多日数宿泊した者として感慨深い気持ちを胸に秘め筆を置く。

葉山セミナーハウスについて

前マスタープラン委員長・工学部教授(当時) 肱 黒 弘 三 (故人)

「セミナーハウス」が建設されている葉山の校地は、由緒ある建物があった土地である。

私共の^{注1}調査結果によれば、取りこわし時に関東学院大学葉山学寮であった建物(写真1)は旧村井家葉山別荘(以下旧村井別荘と記す)であった。この建物については、「葉山町教育委員会広報」等において、『タバコ王村井吉兵衛(村井銀行設立者)が帝国ホテルを設計したアメリカのF・L・ライトに設計を依頼した建物』として記述されており、「有名」な建物とみられていた。私共は「セミナーハウス」を計画するに先立ち、この老朽した、由緒ある建物を、資料として保存すべく、建設時の経緯、ならびに、解体時の実測図、および当初の復元図などの調査、作成を行った。その結果、大略、以下のことが明らかにされた。

旧村井別荘は、東京近郊の保養地として、いわば格好な地に、村井貞之助氏(タバコ王として有名な実業家、村井吉兵衛氏の義弟にあたる)の別荘建築として建てられ、その設計はアメリカ人建築家、ガーディーナー James McDonald Gardiner (1857～1925)(立教大学の初代の校長)によるものとみられる。この建物の創建年代は、種々の資料から、1909(明治42)・1910(明治43)年頃とみられ、当初、「嶺秋荘」(村井貞之助氏の伝記「嶺秋片影」による)と呼称され、創建当時に『相州葉山/村井別荘 MURAI VILLA/HAYAMA』と題された写真集が刊行されている。創建当時の建物の外観は写真2の通りである。(上記資料は、村井四郎氏、植松英吉氏より特に複写をさせていただいたものである。)当時の写真によれば、この高台より、葉山・森戸海岸は、一望のもとにあり、すばらしい眺望であったことが推察される。また、この建物は、ヨーロッパの古典主義建築の特徴がみられ、西欧のこの種の建物の様式的系譜を持った建物であったようにみられる。このことは、建築学的にも、明治、大正の木造洋風建物として貴重なものであったといえるであろう。

さて、この由緒ある建物が老朽し、取壊さざるを得なくなった後、この跡地をいかに利用し、有意義なものにするかについて、多くの人々の意見を拝聴し、検討を行った。

その結果「この地を生かし、本学の教育上の特色となるような性格の建物とし、また、外国の、あるいはこの地域の人びとが利用できるような、多目的な機能を持つ、質の高い建物とする」という大きな方向が定められていた。

大学では、この方針を受けて、将来への展望にたつて、

大学のこれまでの教育の特色であり、また、これからより一層強化すべき内容として、「学生と教師」のより深いコミュニケーション、具体的には、ゼミナール、卒研ゼミ、アドバイザーキャンプ等の強化、密度の高い教育、あるいは、一般に最近いわれる「手作り教育」等を行い得る教育施設にすることとした。そして、これ等を、教育理念として、目標づけるため、^{注2}「セミナー・カレッジ・システム」なる「理念」を想定した。

いうまでもなく、建物は、それを利用する人々の要望を汲み上げて、具体化したものである。建築物という物理的な空間、ハードウェアは、その利用というソフトウェアなしには存在しない。セミナーハウスは、私共が計画した段階では、少なくとも、教育の場として位置づけられる「理念」を優先させたものである。この「理念」は、1977(昭和52)年3月の大学マスタープラン委員会の議を経て「セミナーハウス」として、具体化へと進んだ。その後「セミナーハウス検討委員会」を設立し、幾度かの検討を行った。

その結果、前記の教育施設という性格に加えて、外国の交換学生の宿泊、あるいは交流の場、他大学、宗教団体、学会等との会合、教職員の研修施設、OB、教職員家族等を含めた厚生施設、地域の文化交流の場等々が出され、「アカデミーハウス」等の名称も、あわせて検討された。そして、これらの要望をまとめて、設計が行われ、図面化して、理事会に大学の提案として提出した。

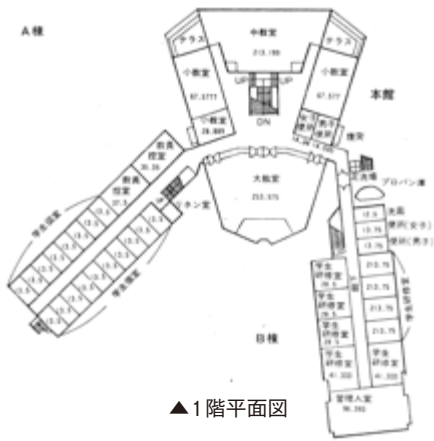
理事会は、これを受けて、学院内他校との調整、ならびに「建築確認」に伴う行政官庁との折衝、そして、建設費用とのかね合いが検討され、現在の規模、内容が決められた。(グラビア葉山セミナーハウス完成予想図参照)その内容は、大教室(約151人収容)、中教室(50人収容)、小教室3(30人収容)、研修室(和室)20室、個室18室、その他、研修室(大)、食堂、浴場等を持つものである。最大宿泊人員は約150人、昼間の会合等の利用は250人程度可能である。

建物の着工は昨年(1978(昭和53年))12月、竣工は明年2月末を予定しており、来年度からの利用が可能である。

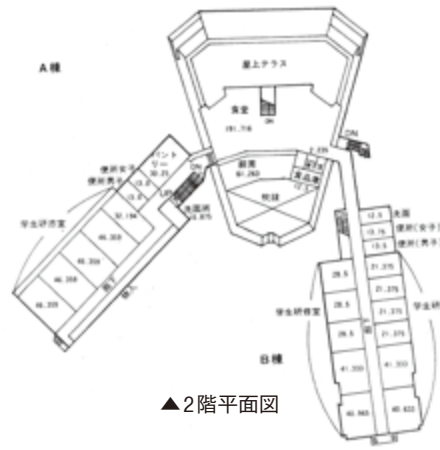
学院内各校を含め、広く利用され、教育の場が広がることを期待するものである。

注1 「旧村井家葉山別荘」調査報告その1(肱黒弘三、関和明、山本順生)関東学院大学工学部 研究報告 第22巻 第1号
注2 「第二次マスタープランの構想について」(高野利治、肱黒弘三)

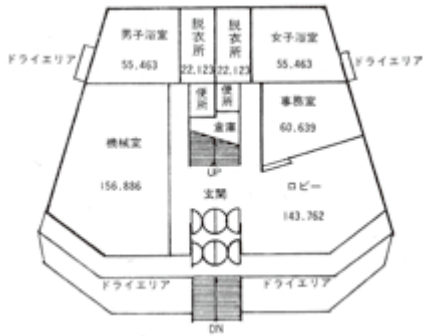
以上掲載の文章は、[1980(昭和55)年1月19日発行『関東学院大学三十年の歩み』「第三章 諸機関とその活動」より抜粋引用](ただし、写真1、写真2および完成予想図は割愛。p.17掲載「校舎」写真参照)



▲1階平面図

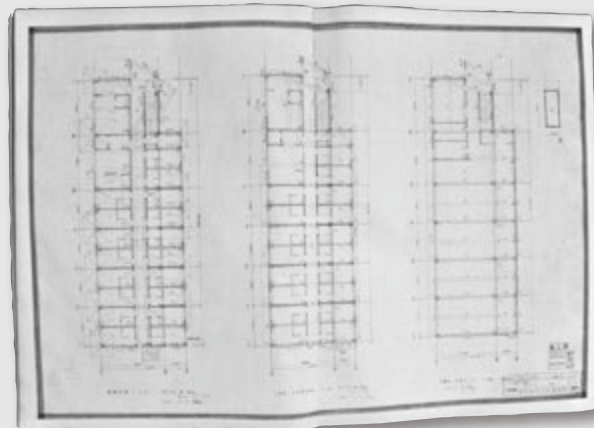
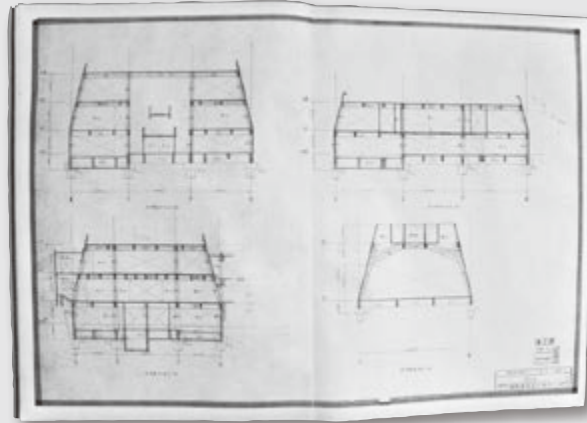
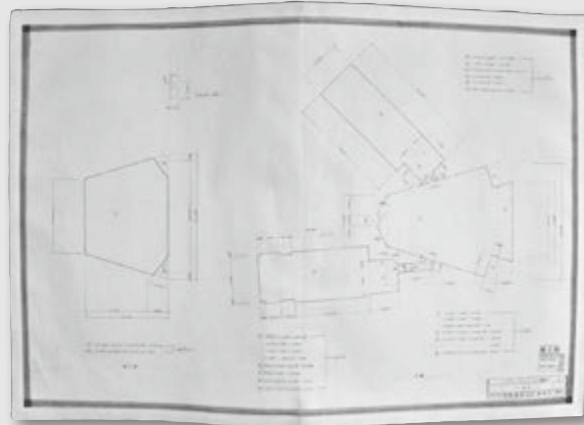


▲2階平面図



▲地下1階平面図

左に掲げた「1階」「地下1階」「2階」の各平面図は、「関東学院百年史」からの転載である。



▲関東学院大学葉山セミナーハウス新築工事竣工図表紙 (関東学院法人事務局施設部施設課所蔵)

- ▶ (上) 同設計図
9「求積表 (I)」
- (中) 同設計図
C6「軸組図」
- (下) 同設計図
C17「梁伏図A棟-1」

新築工事竣工図〔1980 (昭和55) 年5月31日竣工〕

関東学院大学葉山セミナーハウス新築工事竣工写真について

施設部に保管されている「関東学院大学葉山セミナーハウス新築工事竣工写真」アルバムの表紙には同「竣工写真」の文字の下に「設計管理 雪野建築設計事務所／施工 フジタ工業株式会社横浜支店／竣工 S55年5月31日」と金文字で記されている。（／の部分は原本にはない）

このアルバムに収められている写真すべてを、紙幅の関係で縮小してはいるが、このページ以降6ページ

にわたって掲載した。なお、原本写真はカラーであるが、予算と誌面の都合によりモノクロとしてある。しかし、全景写真は表紙に掲載したためカラーのまま掲載された。

竣工時の正面本館の外壁は白色であったが、途中、黒色で塗装し直され、その後、緑色で外装を施され、閉館を迎えるに至った。その他の建物部分については、大きな改築はなされなかった。（学院史資料室）



本館正面



本館正面（階段室及び前面植栽）



中庭側外景（A棟側より）



中庭側外景（B棟側より）



A棟外景部分



本館裏側より中庭を見る B棟外景



ロビーより前面植栽を見る



ロビー（地階1階）



玄関風除室より階段室を見る



事務室



1階ロビー及び階段室



大教室C-101(1)



大教室C-101(2)



大教室C-101(3)



大教室 C-101(4)



C-102



中教室 C-103



中教室 C-104



食堂 (2F) (1)



食堂 (2F) (2)



テラス (2F)



厨房



ゼミ室 (大広間)



ゼミ室及び布団庫



和室 A-103



洋室 A-101



脱衣室 (女子)



女子浴室



男子便所



女子便所



個室 (A棟)



和室8帖X2



和室12帖



和室10帖



管理人室



パントリー



洗面所 (B棟)



B棟廊下 (B棟)



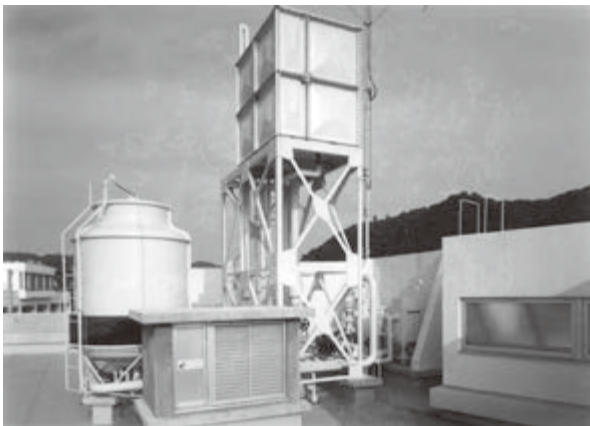
連絡通路及びプロパン庫 (B棟)



機械室



ボイラー室



本館屋上

リンフィールド大学教職員・学生との国際交流の場



於・セミナーハウス入口ロータリー（Japan Study Tour 引率者 David Hansen 教授と学生たち）



於・セミナーハウス大広間（藤本一郎学長、小瀧奎子国際センター所長、伊藤孝一課長、瀬沼達也氏と交換留学生）



於・セミナーハウス食堂（藤本一郎学長、小林徳平大学事務長、瀬沼達也氏と交換留学生）

編集後記

◆今号では、二つの特集を企画した。一つは、関東学院大学葉山セミナーハウスである。2013年3月31日をもって葉山セミナーハウスが閉館された。文字どおり33年間の少人数教育の拠点としての役割を果たした。この機会に記録に留めるべくセミナーハウスの特集を企画した。脇黒弘三工学部教授（前マスタープラン委員長、後年、企画担当常務理事、故人）の文章と竣工時に施工会社が撮影した全写真等を掲載した。途中外装等の塗り替えはあったが、基本的な形状は変わらなかった。セミナーハウスの竣工前にはあの土地に紫苑学園、啓祐学園があった。同校卒業生の伊東尚氏から当資料室に貴重資料を寄贈頂いたので、この機会に執筆依頼したところ、同窓生5名と座談会を開いてくださり、当時の思い出を文章にまとめ、写真もご提供頂いた。二つ目の企画は、「キリスト教に基づく校訓『人になれ 奉仕せよ』」である。元学院宗教主任・元文学部教授の大島良雄先生並びに元中学校高等学校教諭の坂田創先生のご協力も頂き、坂田祐先生初め元学院長の校訓に関する文章を再掲載した。高野進大学名誉教授にはシリーズ企画「関東学院の源流を探る」で中学・高等学校元校長の清水武先生を取り上げて頂いた。三浦啓治氏には、鈴木庸一氏追悼集『人ばしら』を学院史資料として紹介頂いた。学校法人捜真学院の横山茂理事長には、ブラウン博士夫妻顕彰板の設置記事のご校閲を頂いた。この場を借りて、ご協力頂いた前述の方々を初め、元・現教職員の皆様に深謝いたします。（学院史資料室・瀬沼達也）

紫苑学園と啓祐学園の思い出

紫苑学園・啓祐学園卒業生 浅香博俊・伊東 尚・高橋清子
力石寛夫・辻 光子・森都志子

1950（昭和25）年4月紫苑学園小学校に私たちを含めて30名が1年生として入学しました。全校の生徒数は50名強でしたから、その半分を占めた最も人数が多い学年でした。校舎は堀内にあった白亜の三階建の旧村井別荘で、森戸川の支流にかかる三家橋から坂道を上がったところにある美しい洋館でした。1階に職員室、幼稚園、購買部など、階段を上がった2階に教室、別棟に倉庫とトイレがあったと記憶しています。

1年生の授業科目は、国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作と体育、2年生から習字、英語、自由研究が加わりました。通った期間は昭和25年から6年間で物が無く不自由な時代でしたが、先生方が多くの教材を自作され教科内容に工夫を凝らされ、また2年生から加わった習字と英語では学園の外から先生をお招きするなど充実した授業でした。

中でも生徒に人気のあったのは広いグラウンドでのびのびと動きまわった体育や、その延長にあった運動会でした。種目は、徒競走、騎馬戦、玉入れ、ダンス、綱引き、くす玉割り、リレーなどで、先生方と生徒だけでなく、父母も事前の準備や、当日の競技と運営に

加わる家族全員参加型の運動会でした。

行事としてはこの他にも、校舎に布団を持ち込んで寝泊まりした夏休みの校内キャンプ、春と秋に行われた油壺や江の島や鎌倉山への遠足、3年生から始まったわが国初の小学生のグランドホッケーの部活動などいずれも忘れることが出来ません。

楽しい学校生活でしたが、種々の情勢変化から多くの友達が転校して行きました。事態打開のため1952（昭和27）年に紫苑学園から啓祐学園に組織と名称が変わり、更に1956（昭和31）年に啓祐学園が関東学院に吸収されて葉山小学校になったものの、それも私たちが卒業後の1965（昭和40）年には廃校になったそうです。

これらの変遷の幾つかを経験しましたが、卒業した生徒も、転校した生徒も、進学先や転校先で学業を全うして社会に巣立つことができました。卒業後60年ほどを経た今でもクラス会を持ったり、同級生の中には長い海外生活を経験したり、いまでも海外と関係をもって活躍する者が多いなど、紫苑学園と啓祐学園で受けた薫陶のおかげと感謝しています。

各小学校略年表

●建物等の名称は当時のまま。
●記載事項は各校記念誌等に拠る。（表中の備考欄に記載）

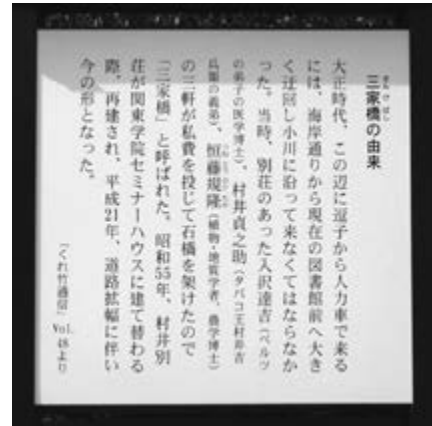
年月日	こと が ら			備 考
	六浦小学校	小 学 校	葉山小学校（紫苑学園、啓祐学園を含む）	
1949年3月（昭和24）	関東学院小学校の設立認可。（六浦校地）		（1948（昭和23）年紫苑学園創設）	（大学30年史） 目で見える40年の歩み 関東学院百年史
1949年4月（昭和24）	大学内にて授業をはじめ。			目で見える40年の歩み 関東学院百年史
1952年1月（昭和27）	中高（六浦）校舎に移転、3月まで同所で授業をする			目で見える40年の歩み 関東学院百年史
1952年4月（昭和27）	青雲寮に移転、1958年3月まで同所で授業をする。	関東学院小学校三春台分教室開設。	（この年の11月に紫苑学園を啓祐学園と改称する）	関東学院小学校の40年 関東学院百年史 （大学30年史）
1953年3月（昭和28）	六浦校地の本校は関東学院六浦小学校と改称する	関東学院小学校三春台分教室から関東学院小学校として独立する。		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1953年6月（昭和28）		教員室・事務室・用務員室を増築。（木造2階建1棟増築）		関東学院小学校の40年 関東学院百年史
1954年4月（昭和29）	礼拝堂・図書館が完成。			目で見える40年の歩み 関東学院百年史
1955年3月（昭和30）		理科室・音楽室建設。教員室拡張工事着工。		関東学院小学校の40年
1956年10月1日（昭和31）			啓祐学園を合併し、関東学院葉山小学校が発足する。	大学30年史 坂田記念館資料

神奈川県三浦郡葉山町に村井貞之助氏の別荘として明治末期（推定）に建てられた写真建物は、太平洋戦争当時に日本海軍に接収されたが、終戦後の1948（昭和23）年、地元有志の尽力によりキリスト教主義の紫苑学園が創設され、その施設となった。紫苑学園は後に啓祐学園と形を改め、1956（昭和31）年には関東学院と合併するに至った。1965（昭和40）年に関東学院葉山小学校が廃校となった後は関東学院の葉山学寮として利用されていたこの建物も、1977（昭和52）年に解体された。

（紫苑学園と啓祐学園に関する記事を掲載するにあたり、その説明資料として2006年発行の当資料室『ニュース・レター』（No.8）から「各小学校略年表」および表紙写真説明の関係箇所を抜粋引用した。同説明文中の「写真建物」については、P.17に掲載の「通学していた当時の校舎」写真を参照願いたい。）



▲通学していた当時の校舎



▲現在の三家橋の説明板



▲1年生の時のダンス（グラウンドの周りは今以上に鬱蒼とした林でした）



▲綱引き（応援は倉沢先生）



▲先生方（右端から光永校長先生、勝俣先生（3～6年の担任）、倉沢先生（1～2年の担任））



▲校内キャンプの参加者（森戸海岸に行く前に、蘇鉄の植込みの近くで撮ったものです）



▶森戸海岸での西瓜割り（参加者全員が生き生きしています）



▲油壺水族館への遠足（東大の海洋研究施設に併設されていた水族館。遠足には母親や弟や妹が多く参加しました）

キリスト教に基づく校訓「人になれ 奉仕せよ」

人になれ
奉仕せよ
その土台は
イエス・キリスト也
坂田 祐

学院宗教センター事務室長 瀬 沼 達 也

色紙に添えて

1919年（大正8年）私立中学関東学院が創立されました。第1回の入学式に学院長坂田祐は式辞として「本学院はキリスト教の精神をもって建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓とする。キリストの教訓をもって人たるの人格を磨き、キリストの愛の精神をもって奉仕することである。これは私が祈って上から示された言葉であった」（要略）と述べています。

【恩寵の生涯】

この色紙の書は、いつ書かれたものか不詳ですが、校訓の次に『その土台はイエス・キリスト也』という言葉をつけ加えることにより、その意味をより明確に表したものと思います。

86歳の時の創立記念日の式辞の中では「キリストのお言葉に『あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。（マタイ5:48）』とあります。この聖言は神様のようになれということではなく、人として完全なものになれということでもあります。またキリストのお言葉に『わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。（ヨハネ15:12,13）』とありますが、これは奉仕の精神であります。以上は校訓のよりどころであります。最後にわが関東学院の立っているその土台のみ言葉を述べます。『神から賜わった恵みによって、わたしは熟練した建築師のように土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういふふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。（コリント第一3:10,11）』と語りました。

【坂田祐と関東学院】

坂田祐は1969年（昭和44年）12月16日、91歳で天に召されました。本年は召天40年に当たります。この時に因み遺された書を色紙に復刻いたしました。

2009年12月16日

坂田 創

〔坂田祐先生のご子息である坂田創先生は、2009年に祐先生召天40年を記念して上掲の色紙を復刻されました。ここに転載の「色紙に添えて」は、そのときにご執筆された文章であります。「キリスト教に基づく校訓『人になれ 奉仕せよ』』と題して「関東学院校訓特集」を企画する際に転載のご許可をお願いしたところご快諾をいただきました。この場をお借りして衷心からのお礼を申し上げます。（編集子）〕

キリスト教に基づく校訓「人になれ 奉仕せよ」を理解することが、関東学院の教職員、学生、生徒、児童、園児に求められている。その理由は、関東学院理事会が、2009年7月25日に開催の同理事会で「125周年宣言」を承認し、これを受けて同年10月10日にパシフィコ横浜会議センターで挙行された創立125周年記念式典において、関東学院ミッションを次のとおり宣言、公表したからである。

「125周年宣言」

関東学院は、キリスト教に基づく校訓「人になれ 奉仕せよ」のもと、一人ひとりが愛と平和の精神をもって、互いに支えあうことを誇りとする、創造性豊かな人間を育てる教育活動を続けることをここに宣言します。

私学の関東学院にとって建学の精神を端的に表す校訓は、教育活動の核であり、存在の意義であり、存続の生命線である。

関東学院の第一の源流は、1884年に横浜山手に創設された横浜バプテスト神学校である。その初代校長で関東学院の創立者であるアルバート・A・ベンネット先生は、真の奉仕の人であった。先生の墓碑に刻まれた銘は、その生涯を端的に表現された“*He lived to serve.*”（彼は仕えるために生きた）であった。

関東学院の第二の源流は、1895年に東京築地に設立された東京中学院である。その設立者であるアーネスト・W・クレメント先生は、台風で校舎に甚大な被害があったとき、自らが病気になるほどにランタンと傘を携えて生徒一人ひとりの健康を気遣った、思いやりに満ちた奉仕の人であった。

関東学院の第三の源流は、1919年に横浜三春台に設立された中学関東学院である。その初代院長の坂田祐先生は、第1回入学式で「人になれ 奉仕せよ」と力説した。これが後に関東学院の校訓となり、現在に至っている。約50年間という長きに亘って関東学院のために尽くした奉仕の人であった。

「キリスト教に基づく校訓『人になれ 奉仕せよ』のもと」との表現は、坂田祐先生自身が「人になれ 奉仕せよ」に続いて「その土台はイエス・キリスト也」と加えられたものと同じ意味である。校訓の意味を正しく理解することが重要であることは明白である。そのために坂田先生初め先生の教え子で、当時日ノ本学園理事長であった森東吾先生並びに当時学院長であった柳生直行先生の著した校訓に関する文章をここにまとめて再掲する次第である。

坂田祐と関東学院の教育

—校訓<人になれ 奉仕せよ>を中心に—

元関東学院宗教主任・元関東学院大学文学部教授 大島良雄

関東学院大学キリスト教と文化研究所「坂田祐研究プロジェクト」主催による2009年度公開研究会が、2009年7月25日に金沢八景キャンパスの大学2号館第4会議室で開催された。元関東学院宗教主任、元大学文学部教授の大島良雄先生を講師に迎え、「坂田祐と関東学院—校訓<人になれ 奉仕せよ>を中心に」と題して行われた。転載の原稿は、その研究会のレジュメである。そのため完全な文章になっていない箇所や、補足説明の必要な箇所もあることは了承いただきたい。この場を借りて転載をご快諾いただいた大島良雄先生に深謝いたします。(編集子記す)

I. 中学関東学院の創設から関東学院へ発展する時期 1919～1930

1. 「関東学院の教育の理想」

中学部学則 第一条 本学院ハキリスト教主義ニ基キ人格ノ修養ヲ旨トシ中学程度ノ高等普通教育ヲ施スヲ以テ目的トス

入学式ノ時ノ訓示 『人になれ』『奉仕せよ』

2. 「入学時の訓示」、この創立第一回の入学式に、日の丸の国旗を立て、君が代を斉唱し、教育勅語を奉読し、聖書朗読、祈祷をもって挙式した。

私は式辞にキリスト教の精神を高調して建学の精神とし、これを具体的に表現する為に「人になれ」と力説した。これは私が祈って上から示された言葉であった。

次に述べたことは「奉仕せよ」であった。

3. 校訓を「平和のチャンピオンとなれ」と具体的に語った。(1924年中学関東学院第一回卒業生への告辞の要約)

三)五年前、我が学院教育の方針、主眼とするところ、即ちモットーを述べた。

それは諸子に先ず第一に「人になれ」ということであった。即ち立派な人格を備えた人になれということであった。これと共に奉仕ということであった。即ち自分以外のもののために尽くすと言うことであった。人になれということと奉仕せよということは相離すべからざることである。吾人の徳は、奉仕によって磨かれるのである。

八)奉仕とは、自分以外のものを益する事である。奉仕は、君に対しては忠、国に対しては愛国となって現れるが、而して其の最大なるものは『人その友のために命を捨つる事である。』

十)我が邦は、戦争に勝つを以って世界に誇ってい

る。戦争に勝っても名誉ではない。しかし武力では世界文化に貢献することはできないし、人道上の貢献もできない。希くば諸子自らその人たれ、学院の校舎から人道上の兵士が、即ち諸子の帽子のカンランが表象する平和のチャンピオンが出ずることを願っている。

4. 1929年、第六回の卒業式の式辞「わが名を天の帳簿に」。(要約)

六)『人間ニナレ』これは動物学上に於ける動物としての人間ではありません。万物の霊長として、神の造り給うた人間であります。この造り給うた神の聖旨に叶う人間になるということでもあります。

七)『人間ニナレ』最高の目標をこれに置くときに、価値が転倒してきます。判断の標準が、全く違ってきます。所謂この世の大成功者、必ずしも成功者ではありません。～地位の低きこと必ずしも失敗ではありません。

八)真の成功は我々を造り給うた神の聖旨に叶う人間になることでもあります。真の失敗は神の聖旨に叶う人間になり得ざることであります。「名ヲ竹帛ニ垂レ」なくとも我が名は「天の帳簿」に記されることが、最も貴いことであるかを諸君は学んだのです。

II. 十五年戦争期 1931～1945

A. 時代的背景

B. 坂田先生の経歴 人となり

1878年秋田県大湯村に会津藩士の後裔として生まれ、貧困のうちに幼少年期を過し、

1896年18歳の時、青雲の志を立て家郷を捨て上京、辛酸をなめた後、

1898年陸軍教導団に入り、翌年11月卒業、陸軍騎兵軍曹に任じられ近衛騎兵連隊に配属され天皇行幸の際には抜刀して御馬車の直後に従い、また皇后の行啓の際には皇后旗を捧持して御馬車の前を騎行したと記しておられます。

1900年騎兵学校に進学し、1901年優等で恩賜の銀時計を受領して卒業し、陸軍士官学校の馬術教官に就任しました。

士官学校に就任する前、外出時に、YMCA前を通りかかり木村清松の説教を聞き、初めて福音に接しました。亦そのときYMの主事、後の同志社大学総長の丹羽清次郎から内村鑑三の『聖書之研究』誌の購読を薦められ購読するようになりました。

1903年2月士官学校馬術教官に就任後、それに隣接

する東京学院の宣教師宅で開催された YMCA の会合でヘンリー・タッピングに出会いました。四谷教会に出席し、当時無牧であった教会を助けていた中田重治の説教を聞き、同年5月3日、四谷教会にはバプテスマを受け、四谷バプテスト教会の会員となりました。

同年11月の現役満期になる前に除隊後は伝道者になる決意をし、軍務に服しながら夜学の霊南坂教会の東京伝道神学校に入学しました。11月30日満期除隊後はタッピングの斡旋により体操教師兼舎監として東京学院の寄宿舎に入りました。

翌1904年新設の東京学院高等科（同校は翌年専門学校と認定されました）に入学しましたが、同年2月に日露戦争が勃発していた為に6月に弘前騎兵第八連隊に召集され、満州に出征、曹長、特務曹長に累進し、戦功によって金鷄勲章を授与されるという軍人として最高の栄誉に浴しました。

除隊後、勉学の志し止み難く、正規の学校への進学を目指し、改めて東京学院中学科4年生に編入学し、第一高等学校を卒へ、帝国大学哲学科に入学宗教学を専攻しました。その間の、彼にとって一番大きな出来事は1911年、第一高等学校3年の時に内村鑑三の門下生となったことであります。爾来聖日朝は内村の集會に出席し、夕べには四谷教会の夕拝に出席しました。

また日露戦争から帰還した時、「戦争は罪悪であると痛感した。正義の戦争なるものはありえない。私は非戦主義者となって帰って来た」。

東京帝大の卒業時の口述諮問で、戦争の可否の問題について「戦争は絶対に不可」と、卒業試験合格の可否を賭けて非戦論を主張しました。

『恩寵の生涯』に86歳のときの「東北の旅行記」が掲載されている。その中で往時を回想し、彼は軍人となって以来、軍人が天皇に直属するものであることを訓えた、「軍人にたまわいたる勅諭」を最も簡潔に武士道の歴史と其の要領を示すものとして受け取り、「忠節、礼儀、武勇、信義、質素を、天地の公道人倫の道としてとらえた。」と述べ、さらに「之を天皇の命令として朝夕奉唱し、その実行に最善を尽くすのは軍人の本分と心得た、私自身は会津武士の端くれの家に育った者であり、軍隊教育を受け、この五箇条の精神を持って鍛えられたのであるが、クリスチャンになった時、至尊の天皇は至尊に非ず、其の上に真の至尊、天地万有の創造主たる唯一の神が存在する。今までの天皇を至尊とする考えを改め、真の至尊なる神に帰依し、武士道の精神を以って神に忠誠を尽くす考えになった」と述べ、私の畑は武士道によって耕され、福音の種が実を結ぶに至るよき地になったと信じているという。

武士道も国民徳も唱導されなくなった今日、福音の種を下ろすに適當なる良き地は何であるか、何処にその良き地を見出すことができるか、～私は基督教主

義の学校は主要なものであると思う、という。

坂田は内村から大きな影響をうけた。内村が米国に留学した時の聖書の扉に、自分の墓碑に刻むように書き残した、

I for Japan	余は日本のため
Japan for the world	日本は世界のため
The world for Christ	世界はキリストのため
And all for God.	凡ては神のため。

彼は内村の其の思想、また内村が、自分の葬式の時に読むように指定していたロマ書7章24、25節「ああわれ悩める人となるかな、この死の体より我を救はん者は誰ぞ、我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」という、彼の贖罪信仰に坂田先生が深い共感をもっていたことは、『人になれ』『奉仕せよ』という校訓の背後に強く感じられるところです。

坂田先生は内村先生の弟子として其の薫陶を受けながらバプテストの信徒として終始された。

先生はまた最初に福音を聞いた木村清松の十字架の信仰、純福音的の信仰にたち、第一次世界大戦が勃発した時は木村、中田、内村の諸先輩と共に再臨運動に参加したこともありました。

内村は非戦の最後の望みをキリストの再臨におき、次のようにのべています。「もし大能の神、とこしえの父、平和の君と唱えられる者が、自から人間の間に下りて、公然と正義とを以って国々の間を裁き給うに有らずば、世界の平和はとうてい望み得ないのである」と。坂田はその思想に共鳴してその運動に参加した。内村の非戦論は学者、思想家、人道主義者としてではなく、信仰の問題として再臨信仰、終末観にたつ神の経綸の業としての非戦論である。

C. 語られた訓話

1. 教育勅語渙発四十周年 1931年「学友会誌」第八号（『坂田祐と関東学院』pp.70ff）

「～学校に於いて教育勅語の捧読、講義、暗誦等に最善を尽くしてきた。併し之が実行に関しては如何」。

「教育勅語渙発四十周年に際し、嘗て此の勅語を拝しなかったとの誤解を受けた、我が恩師内村先生の愛国の至誠を憶ひ、我等キリスト教徒の我が国に対する責任の重大なるを考え、キリスト教主義の下に建てられた我が学院に学ばるる学生諸子の前途を思ひ、秃筆を呵してこの一文を草したのである」。

2. 遵法の精神 1940年卒業式告示（『坂田祐と関東学院』pp.100ff）

～諸子の卒業を衷心より御祝福します。皇紀二千六百年、この光輝ある記念すべき年に卒業すると云うことは何たる幸福でありましょう。～

第一は我が国体の認識を更に深める事であります。

第二は遵法の精神を一層高める事であります。～東亜新秩序建設、国民精神総動員、国家総動員、経済統制、物価統制、興亜奉公日等、如何に高調せられても

何等効果が挙がらないのであります。

遵法の精神の根底をなすものは良心の權威に服することであり、真に偉い人とは、良心の權威に従う人であり、～聖書の箴言に『己の心を治むる者は、城を攻め取る者にまさる』とありますが、己の良心に従って行動する人を言うのであります。

～山上の垂訓の中に『人もし汝に一里行くことを強いなば共に二里行け』とありますが、これは奉仕の精神であります。私が諸子に望むところのものは、この二里行く人になることであり、即ち諸子が課せられた義務以上に務めることでもあります。

最後に申し上げたい事は、諸子は本学院に於いて正しい神の觀念、正しい宗教的人生觀を学んだのであります。人間は何処より来たり、何処へ行くべきかを学んだのであります。人生には何人も遭遇する一大事が来るのであります。

～世の如何なる力を以つても救う事を得ない場合があります。かかる際に諸子に光を与え、希望を与え、力を与える真に信頼すべき言葉があります。それは「インマヌエル」神我とともに在ます。と言う信念であります。

3. 「確乎たる死生觀を」－卒業式告示、1944年中学部21回卒業式

『人になれ』『奉仕せよ』は諸子の入学の時から今日まで幾回か繰り返され、諸子の心魂に徹している校訓であります、即ち立派な皇国民になって君国に最高の奉仕を為す事であり、～それによって皇国民としての尊い目的が達せられるのであります。

古来人生五十年と云われてきましたが、今や人生二十五年と言われるようになりました。

～この危急存亡に際し人生五十年を二十五年に縮めて君国の為^{ヨハネ}に奮闘しなければならぬのであります。

最近私は諸子の先輩または同級生の海軍または陸軍に入隊する者に二つの言葉を餞けしました。それは恐れない事と、決して不平を言わないことでもあります。

死をおそれない為には確乎たる死生觀を持つ事であり、聖書に『我は復活なり命なり我を信ずる者は死ぬとも生きん、凡そ生きて我を信ずる者は永遠に死なざるべし』これほど希望にみちた言葉はないと思ひます。この聖句は諸子の良く記憶する聖句であります。亦『神我と共に居ます』の聖句は我等に偉大なる力を与える聖句であります。之も幾回も繰り返した聖句であります。～よく我が校訓を体し以って日常奉唱する詔勅の聖訓を実現し奉り、以って天壤無窮の皇運を扶翼し奉ることを切に祈願する次第です。

4. 「戦時下の圧迫に抗して」1964(昭和39)年創立記念日(回顧)

～長い年月の間に大震災で校舎の全部が破壊されたこと、大戦争で校舎の3/4が焼かれ、内部の火災で数千坪の建物を失う災害が有りましたが、最も困った

ことは軍部がキリスト教主義学校を圧迫し、迫害を加えたことでありました。

(戦争激化に伴い)「学則からキリスト教主義を削除するように横浜市にある五つの学校に迫ってきました。我々は学校から基督教主義を取り去れば存立の意義がなくなると強調して頑張り、遂に勝利を得て学則の変更を免れました。」

III. 戦後

1. 「人全世界をもうくとも」1946年、戦後最初の創立記念式式辞

～学院の創立の精神はキリスト教の精神、即ち福音の根本義による人間教育であります。キリストの教えにより国家社会人類の福祉に奉仕する人を作る教育であります。『人になれ』『奉仕せよ』を克く体して、終世之が為に最善の努力をせられることを衷心より希望し、之が為に祈るのであります。従来教育は、国家在って個人の無い教育でありました。国の為にさえなければ個人はどうなっても構わない教育でありました。個人の完成は全く顧みられない教育でありました。

2. 「あなたがたも完全な者に」創立記念日式辞 1963. 1. 6 (一日繰り上げ、先生85歳)

～池田総理大臣は最近「ひとづくり」ということをさかんにのべておられり。

また出光興産の社長は、昨年『物質尊重より人間尊重』と言う本を著された。

関東学院は基督教の精神を建学の精神とし、これを具体的に表現するために、『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓と定め、創立以来これを強調して来たのであります。当時作人(人を作る)と言う言葉があり、作人館という学校もありましたが、私が祈って示された言葉は「ひとになれ」という言葉でした。

～天地万有の造り手、父なる神の御ひとり子、完全無欠なるイエス・キリストを模範として、其の教えによって人になる事であり、キリストのお言葉に「あなた方の天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5:48)とあります。

またキリストの御言葉に

「私のいましめ、これである。わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。人が其の友の為に命を捨てること、之より大いなる愛は無い」(ヨハネ15:12-13)之は奉仕の精神であります。

以上は校訓のよりどころであります、最後にわが関東学院の立っている土台のみ言葉をのべます。「～すでに据えられた土台以外のものを据える事は、誰にも出来ない、そして、この土台はイエス・キリストである。」(Iコリント3:11)

関東学院はこのイエス・キリストなる土台の上に建っているのです。

3. 「建学の精神」1963年4月 大学礼拝の説教。

ドクター・クラークのBoys be ambitiousのいわれを述べ、それが関東学院とどういう関係にあるかを話したい。クラークは帰米する前の月に、『イエスを信じる者の誓約』を作成し、其の中に基督教信仰を箇条書きし、我々は之を信じ此の約束を守ると書き、博士が最初に署名し、それから学生に順次署名させ、第一期生は十五名が署名した。それから内村鑑三、新渡戸稲造など第二期生が入学して署名した。関東学院の前身校である東京学院の最初の院長は第一期生の渡瀬寅次郎であった。

私はBoys be ambitiousの精神のもとに学ばれた渡瀬先生が創立時の校長であった東京学院を卒業し、第二期生として学ばれた新渡戸稲造の校長であった第一高等学校に入って先生の教えを受け、それと共に同じくBoys be ambitiousの精神の下で教育された内村鑑三から親しく指導を受けたのであります。

関東学院の校訓『人になれ』『奉仕せよ』は、私から示された事ではありますが、学院を横浜に創立するとき、基督教主義を表面に掲げては学校が発展しないから、中学校としてすべての特典を有する普通の中学校としてやった方がよろしいのではないかとの意見がありました。私は普通の中学校としての特典が得られなくとも基督教主義を正面に掲げてやらなければ真の教育が出来ないと主張し、関東学院中学校で無く中学関東学院として創立したのであります。

関東学院の建学の精神は基督教の精神であります。此の建学の精神を具体的に表現する為に『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓に定め、創立以来四十五年、之を強調してきたのであります。其の根底である土台はイエス・キリストであります。

IV. 校訓を如何に理解するか

1. 人の人格の形成はその人の生きた時代、社会、家庭、恩師、友人などから大きな影響を受けるものなので、それらを考察することが必要である。

2. 先生の追悼講演において学院の卒業生で、元阪大教授・当時日ノ本学園理事長であった森東吾先生は校訓について

a) カーライルの影響について、先生は一高の学生の時に新渡戸稲造からカーライルの『衣装哲学』を学び、「諸君は何かしようとする前に何んであらねばならぬかを考えよ。to doの前にto beの問題を考えよ」と教えられ、此の発想に基づき、to beに应ずるものとして『人間になれ』、to doに应ずるものとして奉仕せよ、とされた。と言う理解であります。人間になれと言っても、どんな人間になるのか必ずしも明確ではないという、問題がある。

b) 『人間になれ』と『奉仕せよ』とは強調点の相違であって、この二つは結局、一に帰すのではないかと

私などが考えるようになったのは極最近のことです。したがってこの教訓は、言い換えると『奉仕する人間になれ』或いは『奉仕することによって、人間になれ』ということでもあります。to doの前にto beの問題を反省することも大切であります。～奉仕することの出来る人間こそ真の人間であると言う一見、平凡のように見えて中々意味深い真理を、人生経験を積むに連れて私共もしみじみ知ようになったのであります。即ち、坂田先生の建学の精神、教育の理念がだんだんと思い当ようになってきたのであります」云々と語っている。

3) 校訓の制定に当たって坂田先生は、其の出典が何処にあるかを明言されず、折って上から示された、即ち啓示によったと言っておられるは非常に意味深いことと思えます。

其の故に 私共其の言葉を私ども信仰によって解釈し理解することが出来るのだとおもいます。

4) 『関東学院大学キリスト教と文化研究所ニューズレター』No.10・11 合併号 公開シンポジウム

『いんまぬえる』No.107の上林喜久子教授の「退任にあたって」

同上 小学校の田中冨也加さん「ひとになれ・ほうしせよ」

その他多くの人々の文章が残されているので、纏めてみるのも面白い企画かもしれません。

参考文献

- 坂田 祐『恩寵の生涯』待晨堂 昭和41年
 坂田 祐先生記念事業委員会編『坂田 祐と関東学院』関東学院 昭和48年
 町田四郎『坂田先生を語る』関東学院 1992年
 学院史資料室「坂田 祐先生」『関東学院学報』第25号、2003年
 岸 政邦『坂田 祐の信仰と生涯』私版 平成19年
 公開シンポジウム「坂田祐と関東学院」関東学院大学キリスト教と文化研究所報『キリスト教と文化』第2号、2004年3月
 関東学院創立120周年記念「公開シンポジウム-校訓<人になれ 奉仕せよ>をいかに理解し生かしていくか」『ニューズレター』No.10・11 合併号、『キリスト教と文化』所報第3号 2004年
 『いんまぬえる』No.107号 関東学院 2009年3月
 「坂田先生を語る」第1回～第3回 『いんまぬえる』No.24～26号 関東学院 1992年3、6、12月
 大島良雄 1930年代論「内村鑑三の非戦の思想と戦時下の抵抗」
 関東学院文学部『人文研所報』第2号 1979年
 「検証・昭和報道」『朝日新聞夕刊』2009年5-7月連載

● 資 料 ●

平和のチャンピオンとなれ

— 第一回卒業生に与うる告辞 —

1924（大正13）年3月9日 中学関東学院
第一回卒業生への告辞 原文をよみよいようにした

一、諸子の卒業を衷心より祝す。

二、今諸子を学校より送らんとするに当り、言わんと欲するところは、新しいことにはあらず。五ヶ年の間教室において、またその他の機会において親しく話したることを簡単にくり返すに過ぎず。しかしかかる諸子の生涯にとって、甚だ大切なる記念すべき機会に更にその印象を新たにせんことを希望するのみである。

三、五年前、仮校舎、即ち寄宿舎の前において、諸子及び諸子の父兄保護者に、我が学院教育の方針、主眼とするところ、即ちそのモットーを述べた。それは諸子に先ず第一に「人ニナレ」ということであった。即ち立派な人格を備えた人になれということであった。これと共に奉仕ということであった。即ち自分以外のものために尽くすということであった。人になれということと奉仕せよということは相離すべからざることである。吾人の徳は、奉仕によって、磨かれるのである。

我が学院の標榜するところは、この点であった。而して今なおこれを主張している。而してこれは学院の存在する限り、主張せらるべきものであると思う。

四、自分はこの目的の下に、教員とともに、全力を尽くしてきたのであるが、徳足らず、力足りず、諸子を立派な人格に築き上げるのに、甚だ微弱なるものであった。自分等教員は範を諸子の前に垂れなければならないのであるが、不完全極まる貧弱さを以ってはどうていけない事であった。

孔子の如き偉人でさえ、七十にして矩を超えずとあるが、況んや微力、徳の足らざる自分を如何にしてこれを実現することができるか、他なし、自分以上、自然以上の力に信頼するより外はない。ここにおいてか、宗教的要求となり祈りとなったのである。祈りなくして、諸子の前に立つことはできなかった。

五、人間になる、立派な人格を築き上げ、完成することは難い哉である。これは果して実現できるかといえば、それは極めて難しいのである。が、しかしたとえ実現できなくても、努力が必要である。実現できない理想を立てて、何の価値あるかと、煩悶がおこる。

実現できなくとも、理想に向かう不断の努力そのものが価値あるのである。

六、余は諸子に向かって、この理想に向かって、努

力することをすすめてきた。諸子もまた努力してきた。即ち諸子は今後永久にこれが実現に努力すべきである。諸君が実業家になる、官吏になる、医者になる……これ永遠の目的の手段でなければならぬ。

七、貧乏になってもよろしい。上級学校に入れなくてもよろしい。この世の事業に失敗してもよろしい。諸子の人生観の基礎を確立して、価値ある生涯を送ることができるならば、諸子の人生は成功である。

八、ここに理想を置いた者に、真の奉仕ができるのである。奉仕とは、自分以外のものを益することである。奉仕は、君に対しては忠、国に対しては愛国となってあらわれるが、而してその最大なものは「人その友のために命を捨つる事である」

九、我が日本においては、国家に対して奉仕する、即ち忠君愛国の勇者は少なくないが、人道上の偉人は極めて少ない。かのモロカイ島の癩病患者のために、一生を献げて、その犠牲となった人、身は英国の貴族に生れ、妙齢にして我が日本に來り、熊本に癩病院を建て、憐れむべき病者のために、その全生涯を捧げている人、我が身貧よりおこり、奴隷の解放に努力した人、暗黒アフリカの土人に福音を伝えるためその生涯を捧げている人等の如きがそれである。

十、我が邦は、戦争に勝つを以って世界に誇っている。戦争に勝っても名誉ではない。しかし武力では世界文化に貢献することはできないし、また人道上の貢献もできない。希くは人道のチャンピオンが生れんことである。希くば諸子自からその人たれ。学院の校舎の兵隊山から人道上の兵士が、即ち諸子の帽章の橄欖が表象する平和のチャンピオンが出づることを願って止まぬ次第である。

註1 このあとに、来賓に対する辞、父兄に対する辞がつづいている。

2 この文は当時の院長のメモによったものである。

（『坂田 祐と関東学院』より）

我が名を天の帳簿に

— 第六回卒業式告辞 —

1929（昭和4）年3月2日 関東学院中学部
第六回卒業生への告辞 原文をよみよいようにした。

一、諸子の卒業を満腔の喜びを以って祝します。

二、諸子が入学したのは大正13年4月この仮校舎ができあがり捜真女学校から引移り漸く一ヶ月を経過したばかりの時でありました。諸子とともに入学したのは、九十九名でありました。入学以来数名の出入ありま

したが、今日七十五名卒業することになりました。昨年までの卒業生の数は、入学当時の数に比して著しく減少し、ある時は二分の一以下に減少しましたが、本年は誠に喜ぶべき現象であります。また従来は卒業の時に成績不良で卒業することのできなかったものが数名ありましたが、今回は皆よく勉強致された結果、全部卒業することができましたことは、誠に喜ばしいことであります。

三、ただ諸子に対して気の毒に思い、また、済まなく思いますことは仮校舎に入れて、仮校舎から出るということです。前の立派な校舎が大地震のために全滅して今度の校舎が落成するまでの間は一度満五年であります、その五年を諸子はこの仮校舎において不便を忍ばれたことです。

四、今諸子を送るに当り諸子にはなむけする言葉は、新しいものではありません、入学以来今日まで教室において、講堂において、また、種々の機会において、諸子に話したことを、今この中学における最後の機会において、今一度くり返して諸子の印象を深めたいのであります。

五、五年前諸子の入学式の時に私が力をこめて申した二つのたいせつなことは、諸子はよく心得ておられることであります。即ち「人間ニナレ」ということと、「奉仕セヨ」ということであります。これは諸子が入学以来今日まで幾度くり返されたか知れません。これは学院教育の主眼とするところであって、学院の存在する限りくり返されることであります。

六、「人間ニナレ」これは動物学上における動物としての人間ではありません。万物の霊長として、神の造り給うた人間であります。その造り給うた神の聖旨に叶う人間になるということです。諸子の向かうところの職業はなんであってもよろしい。職業はなんであっても先ず第一に人間であらなければならない。学院の教育はこの点に目標をおいてこれに集中せられているのであります。諸子の学んだ究極の目的はこの点に帰着せられるのです。

七、「人間ニナレ」最高の目標をこれに置くとときに、価値が転倒してきます。判断の標準が、全く違ってきます。所謂この世の大成功者、必ずしも成功者ではありません、大富豪となることは真の成功ではありません、大臣宰相となることも真の成功ではありません、大将、大学者、大教育家、大宗教家、大実業家、大発明家、大……何々、即ち大のつくもの必ずしも真の成功ではありません。その反対に貧乏必ずしも失敗ではありません、地位の低きこと必ずしも失敗ではありません、病気必ずしも失敗ではありません。たとえ逆境にあり不遇をもって一生を終わるも必ずしも失敗ではありません。

八、真の成功は我々を造り給うた神の聖旨に叶う人間になることであります。真の失敗は神の聖旨に叶う

人間になり得ざることであります。

九、諸子は以上述べましたごとく真の成功はなんであるか、真の失敗はなんであるかを学んだのであります。これがために諸子は、前途において、所謂この世の成功を勝ち得るためには、何物をも犠牲として顧みない人々とは歩調を揃えることができないで落伍者となるかもしれない。また融通のきかない男として嘲笑せられ、度外視せられるかもしれない。落伍者となること恐るるに足らない、融通きかぬと罵られること決してはづるに及ばない。

十、いったい融通のきく人間は恐ろしい人間である、悪を善といい、邪を正といい甚だしきは黒を白といい平気でうそをつくような人間が、少なくないのです。汚職罪、背任罪を犯す人は多くは融通のきく人間であります、かかる人のために善は斥けられ正義は曲げられ、多くの人が、これがために苦しむのです。諸君はかかる融通のきく人間にならぬように希望します。

十一、「名ヲ竹帛ニ垂ル」ということは我々少年時代の理想でありました、シーザーや太閤やナポレオン、その他歴史上の英雄は我等の理想でありました。かかる教育を受けた自分は、今から考えてみれば、甚だ不幸であったと思います。

十二、諸子が学院で教えられたことは「名ヲ竹帛ニ足ル」る、ことではありませんでした。「一將功成リテ万骨枯ル」ということがあります、赫々たる功名をになう大將軍たらずとも無名の戦士として国のために死ぬことのいかに貴いことであるかを諸君は学んだのです。世の賞讃を受くる英雄たらずとも隠れたる人道のチャンピオンたることのいかに貴いことであるかを学んだのです。親任官、勅任官、高等官たらずとも、また銀行の頭取、会社の社長、重役たらずとも一腰弁として、一社員として、また一小僧としてそこに安住の境地を見出して自己の最善をつくすことのいかに貴いことであるかを諸君は学んだのです。

十三、世間から賞められなくとも、我が名はこの世から認められなくとも、人間の書いた歴史に名が残らなくとも、即ち「名ヲ竹帛ニ垂レ」なくとも我が名は「天ノ帳簿」に記されることが、最も貴いことであるかを諸君は学んだのです。「縁ノ下ノ力持」という諺がありますが、諸子は縁の下力持になることを学んだのです。縁の下力持がなければ社会が立ちゆかないのです。国家が立ちゆかないのです。

諸子どうか融通のきかない人間になって下さい。縁の下力持になって下さい。そして社会のため、国家のため人道のために奉仕して下さい。

十四、奉仕の根本精神は「人に為られんと思ふことは人にも亦その如くせよ」という言葉であります。これは新約聖書にあるキリストの御言葉であって黄金律ゴールデンルールといわれるものであります。我々は人からしてもらいたいその事を人にするというのであります。

森の聖者（詩人）ソローが「我等に最も近くある人とは我等が雇い愛し語る我等の使役する者にあらずして我等自らが彼のために使役される場所のその人である」といっていますが、意味の深い言葉であります。キリストは、我れ人を使わんとして来たのではない人に使われんがために来たのであると仰せられて奉仕の最高の模範を示されたのであります。

十五、諸子はこの奉仕の精神をもって学院を出て行って下さい。この精神をもって人のため社会のため人類のためにつくして下さい。

十六、諸子の前途には入学難が横たわっています。また就職難が横たわっております。諸子はこの難関を突破しなければなりません。諸子は最善をつくしても、これを突破することが或いはできないかも知れません。上級学校に入学できないかも知れません。或いは就職できないかも知れません、人生の落伍者となり、失敗者となるかも知れません。

十七、しかし諸子がかかる不幸に処するの途を学んだのであります。どんな逆境に陥っても、失望せず常に光明を認めて進むの途を学んだのであります。どんな窮境に陥っても、希望を失わぬ方法を学んだのであります。

十八、諸子今ここを出て勇敢に進みなさい。そして雄々しく人生の戦いを戦いなさい。不幸にして人生の戦いに敗れこの世の敗残者となっても、神の国への勝利者となり、真の成功者となって下さい。希望の星は諸君の前途に永遠に輝いております。「人間ニナレ」これ、私の生命のあらん限り諸子のために捧ぐる熱い祈りであります。

（『坂田 祐と関東学院』より）

真の奉仕

1954（昭和29年）12月21日に書いたもので
商工高校の「アガペー」にのせたもの

新約聖書のコリント前書第十三章は、愛の「マグナカルタ」といわれている。「マグナカルタ」は大憲章と訳される。ギリシヤ語の、原典のこのコリント前書第十三章に「アガペイ」という語は九つある。そうしてこの「アガペイ」はどんなものであるかを説明し、最後に、限りなく存在するものとして、信仰と、希望と、愛の三つをあげて、そのうち最も大なるものは愛であると記されている。

ギリシヤ語に「アガペイ」の外に、日本語の愛の意味で「エロス」と「フィロス」という語があるが、基督教の愛は「アガペイ」である。

わが学院創立以来、基督教を建学の精神とし、これを具体的に表現するために、「人になれ」「奉仕せよ」の二つの言葉を以て校訓とし、常にこれを強調して来

た。キリストの教を以て、人としての教養を積み、キリストの愛を以て、人の為に奉仕することである。広くいえば、社会のため、国のため、人類のために奉仕することである。その奉仕は即ち「アガペイ」を具現することである。

キリストは、「人その友のために、己の生命をすつる、之より大なる愛はなし」（ヨハネ伝第十五章十三節）と仰せられ、「アガペイ」の最も大なるものと教えられた。そうして、キリストご自身、人類の救のために、十字架にかかり、愛の最高の模範をお示しになった。これは基督教福音の真ずいである。

本年も年末になった。クリスマスは数日のうちに近づいた。

クリスマスは、神が人類を愛したもうて、最高最大の賜を下し給うた、記念の日である。

（『坂田 祐と関東学院』より）

関東学院設立

学校創立の責任を全うすべく先ず第一になすべきことは、土地を選定することであった。方々を探したがなかなか見つからなかった。ついに市の中央に、最も適当な土地が与えられたことは幸いであった。それは現在の三春台の高地である。かつて陸軍連隊区司令部のあったところ、兵隊山と呼ばれていた。陸軍省の所管から神奈川県に移っていた。当時の県知事は有吉忠一氏であった。その好意によって比較的廉価に払い下げをうることができた。土地の面積約一万二千坪、時は大正7年（1918年）の6月であった。人殺しをけいこする道場の兵隊山が、日露戦争で金鷄勲章を受けた予備軍人を校長とするキリスト教精神の学校の敷地となり、人を殺すのではなく、人を生かす福音を教える平和の殿堂と変わるとは、実に奇しい摂理であった。

いよいよ来年開校である。学校の名称は大きく、関東学院と名づけられた。これに「私立中学」を冠した。校章は榎らの葉をもって「中学」包んだ。榎らは平和のシンボルである。校色をオリーブに定めた。職員組織もできた。数名の教員の中に、米人宣教師が二名いた。教頭は東京帝大の英文科を卒業した文学士、高田運吉君であった。

大正8年1月8日神奈川県知事より「私立中学関東学院」の設立が認可された。設立者C・B・テンネー、生徒定員六百名。ついで1月25日、坂田祐を学院長に任命することが認可された。

学院創立に関する官庁の認可があったので、これを県下に発表しなければならない。少くとも横浜市内の小学校に知ってもらわなければならない。有吉知事の懇切なる指示により、創立の披露会を開催することにした。県当局、市内小学校長は勿論、教育関係者に案内

状を出した。時は大正8年(1919年)1月27日の午後、横浜開港記念会館において開催した。来会者約三百名、学院からテンネー理事長以下理事並びに教職員、県から有吉知事、市から久保田市長代理吉田助役が出席した。テンネー理事長は設立者として挨拶し、私は学院長として、キリスト教の精神を根底とする学校教育の必要を力説した。有吉知事の祝辞は懇切周到、大いに感奮興起させられた。米国大使の祝辞もあった。披露会は万事都合よく運ばれて終了した。この日は曇天で降雪あり、非常に寒かった。

この披露会には県当局者の臨場をえたが、学務課の事務担当の職員を招待することに気がつかなかったの、あとでそれらの人々から注意を受けて恐縮した。全く予期しないことであった。官庁方面では下僚の事務を担当する人々に敬意を表しておかなければならないことを知らされた。それで日を改めてその関係者だけを招待することにしたが、辞退されたので、全く無経験のためから失礼したことを謝して理解してもらった。これは学院創立最初の黒星であった。この創立の披露をした1月27日を以て、関東学院創立記念日と定めた。

本校舎は鉄筋コンクリートで建築することになっていたが、それは時日を要するので、取りあえず木造の寄宿舎を建てこれを仮校舎として使用することにした。四月から開校するから早速生徒募集を開始した。第一学年一組四十名として三組百二十名を募集した。私は市内の小学校にあいさつに廻った。毎日数校ずつ数十校を訪問した。各校長にあって創立の趣旨を話し後援を求めた。小学校から生徒を送られるのであるから、その後援がなければ私学は成立しない。キリスト教主義の学院であるから、特に建学の精神を話して理解を得ることに努めた。幸いに各校長はいずれも敬意と同情をもって迎えてくれた。

志願者は三百七十七名あった。四月五日入学試験を行い、百四十七名に入学を許可した。これを四つの組に編成して四月九日仮校舎の前で第一回の入学式を挙行した。幸いに晴天であった。従来ミッションスクールは入学式とか卒業式などには、日本の国旗を掲げないで米国の国旗を掲げるのが多かった。聖書の朗読、讚美歌の合唱はあったが、教育勅語の奉読、国歌「君が代」の斉唱はなかった。これは私の気に入らないことであった。関東学院はキリスト教主義の学校であるけれども、日本の学校で、日本人を教育する学校であるから、この創立第一回の入学式に、日の丸の国旗をたて、君が代を斉唱し、教育勅語を奉読し、聖書朗読、祈禱をもって挙式した。私は式辞にキリスト教の精神を高調して建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』と力説した。これは私が祈って上から示された言葉であった。『……諸子は将来学者になり、教育家になり、実業家になり、政治家になり、弁護士になり、医者になり、軍人になり……になるであろう

が、何者にかなる前に、先ず人にならなければならない。……』と強調した。

次に述べたことは『奉仕せよ』であった。人のために、社会のために、国のために、人類のために尽すことであると力説した。爾来キリスト教の精神をもって本学院建学の精神とし、これを具体的に表現するために『人になれ』『奉仕せよ』の二つの言葉を校訓として、機会ある毎にこれを強調して今日に至ったのである。キリストの教訓をもって人たるの人格をみがき、キリストの愛の精神をもって奉仕することである。

入学式をもって、ここに学校は開始された。中学校の学科課程の外に聖書を学科として授けた。キリスト教の重要な行事として、毎朝礼拝を行った。最初、宗教の行事は強制しない方がよいと、有力なミッションスクールの院長である先輩の意見に賛成して、礼拝の出席を自由にしたが、しかし後に至ってよく研究検討の結果、中学時代はむしろ強制した方がよいとの結論に到達したので、必ず出席させることになった。

訓育の方法は、多数の生徒を対象とすることであるから、それには軍隊的方法が一番よいというので、他の公立の学校と同様、制服制帽、ゲートルを着用させ、規律を厳格にした。ただし他校と異なる点は、教師の勤務を大いに自由にしたことたであった。教師は公立学校のように出勤する必要がないから、日曜祭日の外に一週一日は交互に休むことにした。

それから成文をもって規定や規則を作らなかった。それをもって得々としていたが、今から思えば実に乱暴なことであった。教育の経験がないとはいいいながら、全くめくら蛇であった。そして公立学校を規則づくめの官僚主義と侮べつての眼で見たものであった。独善ほど恐ろしいものはない。果せるかな、一学期もたたないうちに訓育は行きづまった。その筈である。先生は一週一日休むのであるから毎日、一人或いは二人、時としては三人も休むことがあり、生徒の取締りができないようになった。当時学校の校庭に小山があり、周囲は竹藪でおおわれていて、生徒のかくれんぼうには、もってこいの場所で、先生の骨折りは一通りでなかった。三十数年たった今では、母校の幹部となり、理事となり、評議員となり、PTAの会長となり、大いに母校のためにつくしている連中も、この竹藪の中を馳駆したものであった。先生等は終いに悲鳴をあげて、職員の服務規定を作り、生徒の心得を作った。先生が一週一日休むことはとんでもないことである。生徒に六日の登校をさせるなら、先生は寧ろ七日登校する必要があることが分ったのである。中学の先生は、大学や専門学校先生とは、この点で全くちがうのである。公立学校の服務規定や生徒心得などは、数十年の体験からでき上ったものであり、多くの長所があるので、少なからずこれを取り入れることにした。

開校第一年が過ぎ、大正9年3月鉄筋コンクリートの

本校舎が竣工したので、これに引き移った。仮校舎として使用した建物は、寄宿舎として四月から開舎した。舎生約二十名、高田教頭舎監となって舎生と起居を共にした。きちょうめんで温情のある舎監の感化は良好であった。ほほえましいエピソードもある。当時の舎生であった卒業生は、この恩師に対し、中老になった今もお懐かしく当時の舎生活を追想している。高田教頭は現在熊本の国立大学の教授であるが、先日上京を機とし、昔の腕白連およそ二十名集り、ニュー・グラウンドに先生を招待して謝恩の会を開き、当時を語ったのであった。うるわしいことである。(1957年11月) (『新編 恩寵の生涯』より)

科学の発展と人生

最近、気象庁が米国から借入れた大型電子計算機は、加減算を一秒間に四万回処理するというから驚く。又円周率を小数点以下七〇七桁^{けた}まで計算するのに、ヤンクスという学者は一生かかったとのことだが、この機械では、たった四十秒でやってのけ、現在一万桁まで求められているとのことである。

昨年の秋、米国で妙な核実験をやった結果、二つの答えが出たそうだ。それは大陸間弾道弾に対する防衛可能の希望と、防衛不可能の絶望と、相反する両極端のものであったとのことである。

科学の発達には電子計算機の発明となり、又核爆弾の発明となる。

一方は人類に多大の利益を与え、他方は人類を絶滅する。

かく科学の発達には人類を幸福にし、又不幸にする。

人生の目的は何であるかについては、科学は全く盲目である。人生に善用され、又悪用される。科学自身はその善悪を決定することができない。これを決定するのは人間の思考である。機械はいかに精巧に作られても、機械は結局機械であって、生命がないから、決して考えることができない。

思考は人間独特のものである。哲学者デカルトは、凡ての存在を疑ったが、ただ一つ、自分が疑っていることは疑うことができない。疑うとは、疑わしく思うことである。されば極端なる懐疑の中に於ても、なお確実なるは「我は思う」ということである。我が思うことが確実であるから、我の存在もまた確実であるとの根本真理に到達したのである。それはあの有名なる「我思う故に我あり」という句で言い表わされている。(波多野精一博士『哲学史要』)

かく人間は先ず考え、然る後に行動する。この考えは倫理的批判の対象となる。その行動を善ならしめるには、その考えが善良でなければならない。ここにモラルがある。このモラルは、最高の規範を標準とするものである。

これは人生究極の理想、即ちスンナム・ボーナム〔最高善〕である。大学教育に於ては教養学科を重視する。教養学科は、この理想を目標とする。

わが大学に於ては、教養学科に基督教学を加え、これに重点を置き、これを土台とし、この上に人間を形成することを目的としている。その土台はイエス・キリストである。これはわが学院の建学の精神である。

「人になれ、奉仕せよ」の校訓はその具体的表現である。即ちキリストの愛の精神に従って、人のため、社会のために奉仕することである。(1959年)

(『関東学院教育の群像』より)

キリスト教教育

昨年、宣教百年に際し、私の考えたことは、わが学院の教育は、これでよいのかということであった。学院内の大学以下各学校は、それぞれ、その分野に於て、順調に発展し、その使命を果しつつあるのであるが、学院存立の最高使命であるキリスト教教育は、これでよいのか、ということであった。

私がこれを考えていた時に、昨年九月、御殿場東山荘に於て、日本キリスト者学会と、日本クリスチャン・アカデミーと、ブルンナー会との、共同研究会が催された。この研究会に於けるシュミット博士の講演は、キリスト教教育の根本精神を語るもので、私は、この博士の説に大いに共鳴し、又教えられるところ多く、深い感銘を与えられたのであった。

本年は関東学院創立満四十一年である。1月27日の創立記念日の式で、私はシュミット博士の講演の大意を朗読して式辞にかえた。最後にこれの要約を、左の通り繰り返して強調した。

一、キリスト教教育は、何かうまい方法で、異教徒をクリスチャンにすることを目標とするものではない。キリストへの教育ではなく、キリストからの教育であること。

一、真の教育は、ただ真の自由の中に於てのみ可能であること。われわれ教育者は、教育の主ではなく、あくまで教育の務めを果すための仕え人であること。従って謙遜に神の權威をあがめること、教師の權威は、神の權威を尊んでいるということの中に存する。

一、教育者の第一の特質は、学生と一緒にあって勉強し、一緒に真理への道を歩いてゆくこと。

一、教育者としてのキリスト者は、何よりも、神の愛を知る人であり、この世の任務の中に、愛の息吹きを吹き込む人であること。学生をどんな偉い人間に仕上げようかということではなく、この学生に対する神のみ旨はいずこに存するかを、愛の心をもって見守るべきこと。

一、真の教育は、人間が、真に人間となるため、すなわち、神の子となる自由を保ち、隣人に奉仕するよ

うに訓練するためにあること。

一、教育の聖書的基礎づけとは、何か特別な教会的、キリスト教的教育方法を考案するというのではなく、教育の高い使命は、まことの礼拝たることに存する所以を、明らかにすることに他ならないのであること。

以上簡単に要約して繰り返したが、わが関東学院の建学の精神はキリストの教訓によって人になり、キリストの愛の精神を体得して隣人に奉仕するように訓練することである。シュミット博士の説に、根本に於て、全く合致するのであってまことに欣快にたえない次第である。(1960年2月)

(『新編 恩寵の生涯』より)

以上 P.23 から続く校訓に関する全資料は、坂田祐先生執筆文章である。(学院史資料室)

1971(昭和46)年1月27日 横浜市民会館で開かれた森東吾氏による坂田祐先生追悼講演「坂田 祐先生の人と教育理念」からの抜粋引用。

(『坂田 祐と関東学院』所収)

坂田先生の教育理念

私立学校が国公立の学校に対して明瞭な特徴を打ち出すとすれば、建学の精神のうちこそ、その特徴が示されていなければなりません。しかも、私立学校の性格はひとえにその創立者の人格によって決定されるといっても過言ではないのであります。慶応義塾は福沢諭吉の人格を離れて、また同志社は新島襄の人格を抜きにして考えることはできません。われわれは、これまで述べてきたような坂田先生の人格を通して立身出世主義ではなく「人間になれ」「奉仕せよ」ということを建学の精神として学んだのであります。

先生は第一高等学校の学生時代に校長の新渡戸先生からカーライルの『サター・リザータス』(『衣裳哲学』1838年)の講義を聞き、「諸君は何かをしようとする前に何であらねばならぬかを考えよ。To doの前にto beの問題をまず考えよ」と教えられ、この発想に基づき、to beに應ずるものとして「人間になれ」、To doに應ずるものとして「奉仕せよ」を標語にされたのだということでありました。しかし、すこしく冷静に批判的に考えてみると、「人間になれ」というだけでは、実のところ、どんな人間になってよいのか、必ずしも明白ではない。もし仮りに、これを「真の人間になれ」と言い直してみても、しからば「真の人間」とは何かということになり、これまたむずかしい問題となってまいります。

人間になれと奉仕せよは不可分

しかし、第一回の卒業式のときの訓辞が文章になっ

ているのでこれを読みますと、先生は、「人間になれ」ということと奉仕せよということとは離すべからざること、吾人の徳は奉仕することによって磨かれる。すなわち、立派な人間になって人のため、社会のために尽すことがわが学院の標榜するところで、これが建学の精神である」と強調しておられます。実は「人間になれ」と「奉仕せよ」とは強調点の相違であって、この二つは結局、一つに帰するのではないかと私などが考えるようになったのはごく最近のことです。したがってこの教訓は、言い換えると「奉仕する人間になれ」或いは「奉仕することのできる人間になれ」、それが真の人間であるということになります。もう一度、言い直すと、「奉仕することによって、人間になれ」ということとあります。To doの前にto beの問題を反省することも大切であります。またTo doによってto beの問題が解決されるのであります。真の人間とは他人の悲しみをその人とともに悲しみ、他人の喜びをその人とともに喜ぶことのできる人間であり、またひととは奉仕することによって魂と魂の真の触れ合いを体験することができるのでありまして、奉仕することのできる人間こそ真の人間であるという、一見、平凡のようにみえてなかなか意味の深い真理を、人生の経験を積むにつれて私なども必み必み知ようになったのであります。すなわち、坂田先生の建学の精神、教育理念がだんだんと思い当たるようになってきたのであります。

仕える幸福

学院長 柳生 直行(当時)

ベンネット先生のこと

1984年は関東学院創立百年の記念すべき年にあたります。今から百年前の1884年にアメリカ・バプテスト教会の宣教師たちが横浜の山手に、横浜バプテスト神学校を創設した、それがわが関東学院のはじまりであります。その神学校の校長はA・A・ベンネット、教師はT・P・ポートとC・H・D・フィッシャーの二名、生徒は五名だったということです。キリスト教そのもののはじまりが先生一人、弟子十二人であったことが思い出されるではありませんか。

ともあれ学院が神学校からはじまったということは、たいへん大事なことだと思います。おそらくアメリカのバプテスト教会は、日本がもっとも必要としているのはキリストの福音であると考えて、まず専門的な神学教育から奉仕を開始したのでありましょう。右の三名の先生がたが教えた科目は、聖書学・教義学・説教学・キリスト教史などであったということですが、彼らがどういう教育をしたのか、ポート、フィッシャーの両先生についてはよくわかりませんが、ベンネット校長に関しては多少資料がありますので、ここで簡単にご紹介しておきたいと思えます。資料と申しまして

も私が見たのは二つにすぎず、一つはベンネット先生著『説教学』、いま一つは先生の奥様が書かれた『素描——(神学博士) アルバート・アーノルド・ベンネット——その生涯と人物』、この二冊の本であります。ところで、『説教学』は英文も邦訳も大学図書館にあります。『素描』のほうは、いま私が見ているのは元関東学院大学教授多田貞三先生の手になる邦訳原稿でして、これは近く出版される予定、以下私が引用するのはこの多田訳からであります。

ベンネット先生はじつに謙遜な、奉仕の人であったようです。1886年から二十三年間横浜バプテスト神学校で旧約学を教えたC・K・ハリントン博士は、ベンネット先生の葬儀の式辞の中でこう述べております。

「彼はそのために自分の邸内に一軒の家を建てました……当時はまだ校舎がありませんでした。長年のあいだ校長として尽されましたけれど、きわめて謙遜な方で『校長』の肩書きは受けようとしませんでした。——しかし、つねに学校の首席教授であり、校内の精神的主力となっていたことは、同僚の諸君もみなわたしと同感であると思います。……その地域の人々は一般に「ベンネット博士の学校」と呼んでおりましたけれど、あながち間違いではありませんでした。学校内における彼の存在、聖書に対する厳密な、愛を以てする知識、熱心な福音主義の伝道精神、親切で巧みな学生への応対等、すべてが広い範囲にわたって、この学校の生命であり、光であり、また力でありました。かくして、彼はこの国〔日本〕におけるわが教派の仕事に関係しているほとんどすべての牧師、伝道師の上に深い感銘を残されたのであります。」

もう一人の同僚J・L・ディーリング博士もこう語っています。

「彼は一人の教師としてその人柄を学生の上に印象づけること甚大でした。日本中のバプテスト伝道師のほとんど全部が彼の手によって教育されました。神の言葉に対する忠誠と、真理に対する敬虔な態度、さらに説教者の台本として聖書を重んじたこと等は、今日のバプテスト教職者に深く印象づけられたところであります。……これが彼らをして特別敬虔な、聖別された一団の人々とならしめた所以であります。彼の門下生たちは、ほかに何を知らなくても、新約聖書についてのおどろくべき知識を与えられ、彼の手を離れて、真に御言葉を宣べ伝えるために世に出て行くことができたのだ、と言うべきです。彼が学生を教えることに倦み疲れた姿を見せたことはありません。また学生が彼に質問して、彼の辛抱づよい行きとどいた解答を与えられずに終わった、というようなこともなかったようです。」

ベンネット先生は1909年10月12日に横浜の地で亡くなりましたが、外人墓地のその墓碑にはHE LIVED TO SERVE(彼は仕えるために生きた)と刻

まれています。「彼は仕えるために生きた」——なんというすばらしい言葉でしょう。それはまた、うれしいことに、わが学院の校訓「人になれ、奉仕せよ」とまったく同じ精神を言いあらわしています。「人になれ、奉仕せよ」とは、要するに「仕えるために生きよ」ということではないでしょうか。私はすばらしい校訓を与えて下さった坂田祐先生を誇りに思っています。と同時に、わが学院のいしづえを据えて下さったベンネット先生をも誇りに思うのであります。坂田先生と言ひ、ベンネット先生と言ひ、こんなにすばらしい精神的指導者をわが学院に与えて下さった神様に、心から感謝しようではありませんか。そして、人になって奉仕するよう、また仕えるために生きるよう、おたがいにいっそう努力しようではありませんか。

恐ろしい言葉

ところで、仕えるために生きるとはどういう意味なのでしょう。私見によれば、「仕えるために生きよ」とは、じつにふしぎな、じつに恐ろしい、そしてじつによるこぼしい言葉であります。

(一) どうしてふしぎなのか。「仕えるために」と言ひ、「奉仕せよ」と言うとき、そこには目的語が書かれていませんが、自分に仕え、自分に奉仕せよと言っているのではないことは明らかでしょう。目的語が書いてなくても、それが他者のことを言っていることは明白でしょう。そうすると、他者に仕えるために生き、他者に奉仕せよということになるわけですが、では、なぜそんなことをしなければいけないのでしょうか。人間というものは生まれつき自分を第一に考える、自分の利益に奉仕する、自分の得にならないことはやらない——そういうものなのです。つまり、人間にとってはそれが自然なのです。それが自然なのだったら、そのように生きればいいではありませんか。しかるに、ベンネット先生や坂田先生、いやキリストご自身が「他者に仕えよ」とおっしゃる(マタイ20・26～28)。人間自然の流れにさからってそうおっしゃる。だからふしぎなんです。

ふしぎといえどもっとふしぎなことがあります。それはこういう言葉です——

人びとは愛によって生きる。自己愛は死のはじまりであり、神と人びとへの愛は生のはじまりである。

これはトルストイの言葉ですが、「愛」の代わりに「奉仕」という文字を入れて、もう一度読んでみてください。

人びとは奉仕によって生きる。自己への奉仕は死のはじまりであり、神と人びとへの奉仕は生のはじまりである。

これはじつにふしぎな言葉です。人間としてたいへん自然な生き方をしている人、つまり、つねに自分のことを第一に考え、自分の利益にまず奉仕し、自分の得

にならないことは決してやらない、そういう人は永遠の死にむかって歩いているのであり、それとは反対に、ベンネット先生のように、他者に仕えるために生きる人は永遠の生命にむかって歩いていると言うのです。それはほんとうでしょうか。このふしぎを解くこと——人生においてこれ以上に重要な問題はほかにありません。

(二) どうして恐ろしいのか。福音書に描かれたイエスは、つねに「あわれみ深いおやさしいイエスさま」ではありません。福音書にはいたるところ、ぞっとするような恐ろしいことが書かれています。たとえば、「もし右の目なんじをつままずかせば、くじり出して捨てよ。五体の一つ減びて全身地獄に投げ入れられぬは益なり」(マタイ五・二九)。私にとって、とりわけ恐ろしいのはマタイによる福音書 25 章 31～46 節の、すべての国民が羊とやぎのごとく右と左に分けられる、あの最後の審判の場面です。後半だけ引用します。

「それから、左にいる人びとも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。お前たちは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや獄にいたときに、わたしを訪ねてくれなかったからである。……これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」。

私が「恐ろしい」というとき、二つの意味があります。一つは、「他者に仕えるために生きよ」との神の命令にそむくとき、私は「永遠の刑罰を受け」なければならぬ——だから恐ろしい。もう一つは、これらの最も小さい者のひとりが空腹のときに食べさせ、かわいているときに飲ませ、病気のときや刑務所に入っているときに訪ねる、なんてことはこの私にはとてもできそうもないから——だからこの命令が恐ろしいのです。

こういう私にとっては、トルストイの次の言葉はまことに手きびしく、さながら身を刺される思いがいたします。

口先だけでなく、ほんとうに他人を愛しようと思ったら、やっぱり口先だけでなくほんとうに自分を愛することをやめなければならない。通常われわれは、他人を愛していると思い、自分自身にも他人にもそう思い込ませようとしているけれど、じつは、それは口先だけで、ほんとうは自分を愛している場合が多い。われわれは他人に食わせ、他人を宿らせることは忘れるけれど、自分にそうすることはけっして忘れない。それゆえ、実際に他人を愛するためには、他人の場合しばしばそれを

忘れるように、自分自身をも食べさせたり寝かせたりすることを忘れる術を学ばねばならない。

人間の生き方には二つの極限がある。一つは己れの友のためにいのちを捨てることであり、もう一つは自分の生活条件をまったく変えないで生きることである。すべての人びとはこの二つの極限の中間に生きている。ある者はすべてを捨ててキリストに従った彼の弟子たちに比すべき生き方をしているし、ある者は「生活を変えよ」と言われたら、すぐにそっぽをむいて去って行った金持の青年と同じ生き方をしている。この両極の間に、一部自分の生活を変えたザアカイのような人たちがいる。

よろこばしい言葉

(三) なぜよろこばしいのか。パスカルによると人間は次の三種類に分けられるそうです——「第一は神を見出してそれに奉仕する人びとで、彼らは賢くて幸福である。第二は神を見出さないし、探もしない人たちである。その人たちは愚かで愚劣である。第三はまだ神を見出さないけれど、これを探している人たちで、彼らは賢いけれどまだまだ不幸である。」(傍点柳生、以下同じ)

ついでにもう少し、この問題について古今の賢者たちが言っていることを聞いて下さい。

他人に対して善を行なう者は、何よりも自分自身に対して善を行なっているのである。その善に対して報酬があるという意味ではなく、善を行なったという意識がすでに大きな喜びを与える、という意味においてである。

善を行なうのは喜ばしい。自分の行なった善をだれも知らないことがわかったら、その喜びはますます増大する。

人間にとって、私欲を離れて他者のために働くこと——つまりは永遠の神のために働くことほど大きな幸福はない。

これに似た言葉はほかにもたくさんありますが、それらはいずれも「他者に仕えるために生きる」人は大いなる喜びと真の幸福を手に入れることができる、と言っているのであり、それは結局マタイによる福音書 10 章 39 節の「自分のいのちを得ている者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失っている者はそれを得るであろう」とのキリストの宇宙をつらぬく真理の言葉を解説したものにほかなりません。「仕えるために生きよ」とは、ふしぎな、恐ろしい言葉です。が、ここにのみ人生の喜びと幸福と永遠の生命とがあるのです。(引用は主としてトルストイ『文読む月日』(上)北御門二郎訳、地の塩書房による)

(『いんまぬえる』(No.33) 1984 年 10 月発行より)

学院史資料展 2013 「建学の精神と校訓『人になれ 奉仕せよ』」の教育



2013 東日本大震災復興支援ボランティアプロジェクト

実施期間：第1回 7月30日～8月3日
 第2回 8月27日～8月31日
 活動場所：宮城県南三陸町及び気仙沼市



2011年の被災地救援ボランティア活動以来、南三陸での奉仕活動は今回で3年目になりました。「人になれ 奉仕せよ」の校訓の下、多くの学生が少しでも被災した方々のお役に立ちたいとの思いを胸に、活動を行っております。

南三陸町は、被災した建物の大半は撤去され浸水地域は一面の荒野のごとき状態です。かつての町の中心地に町を再建することはかなわず、すべてが高台に築かれることとなりますが、その作業は遅々として進んでいません。応急と名前のついた仮設住宅での暮らしも既に2年を経過しており、被災者の皆さんにはあきらめの表情も垣間見えます。その皆さんに、すこしでも元気になっていただこうと今年も学生たちは頑張りました。

写真は、仮設住宅付近での側溝清掃です。働き手の職場が町内からなくなり、多くの皆さんが速く内陸部へ向かわれます。仮設住宅に残るのは、お年寄りばかり。そこで、若い力でいつもはできない清掃を引き受けました。

そのほか、地域の草刈、支援物資の配布、仮設住宅の窓拭きなどの奉仕活動を行いました。しかしなによりも大切なのは、地域の皆さんとの交流です。それぞれの作業の合間に、様々なお話を聞き取る。時には仮設住宅の中に招かれることもありました。

これも、2年間の活動の蓄積が関東学院に心を開いて受け入れていただいていることにつながっていると思います。

日本バプテスト同盟気仙沼教会での研修会

今年度も、ボランティアプロジェクトの主な活動場所は、宮城県南三陸町でしたが、そのうちの半日を気仙沼市での研修に当てました。

気仙沼市は、人口も多く港湾から工場地帯、商業地区、住宅地区が広がる都市でした。その都市にも容赦なく津波が襲いかかりました。重油タンクが爆発し、火災が発生したり、車の渋滞により逃げ遅れて犠牲になる、多くのビルに孤立した避難者も多数おられるなど、南三陸とは違った都市型の災害の姿がそこにありました。

今回私たちは、その体験を少しでも持ち帰ろうと、現地の見学と併せ、バプテスト同盟気仙沼教会の全面的なご協力をいただき、被災された教会員の方のお話を伺う機会を設けていただきました。

南三陸でのお話では、余りにも巨大な津波の来襲になすすべもなく、呆然とされていたというお話で、なにしろ高台に逃げるのが最優先でした。しかし、気仙沼では、人工物が多いなかで如何に身を守るか様々なお話を伺えました。町の中にいた場合、どうすればいいか。何をすればいけないか。お年寄りや幼児、障がいをもたれた方々など社会的弱者をどのように守るべきか。

今回の体験は、学生たちのこれからの進むべき道に大きな指標となって心に残ったものと考えます。

まとめ

元の生活を取り戻す。それではじめて復興を成し遂げたといえるのではないのでしょうか。であるとすれば、現地の状況は余りにもかけ離れています。衣食住そして産業。われわれにその支援をすることはできません。われわれにできることは、現地の皆さんに寄り添い、励ますことしかありません。もとの笑顔に満ちた生活に少しでも近づき、復興したといえるまで、この交わりが絶えないように、していきたいと思えます。

(関東学院大学)



東日本大震災被災地を覚えて2013年夏

震災から2年が過ぎたある日、学校に届いた一通の封書に目が留まった。福島県平市にあり、本校と同じバプテスト同盟に所属する平幼稚園からの手紙であった。平幼稚園は、震災直後から原発の事故による放射線被害から子どもを守る働きに力を尽くしてこられた。園庭表土の入れ替え、高圧洗浄機による除染作業の結果、放射線量は下がってきたそうである。そして、震災後、砂場や草木で遊ぶ事が出来なかった子どもたちのために、砂場の砂を入れ替えて砂場を再開する事、震災前と同じように季節ごとの花や植物、野菜に囲まれた幼稚園にする事の両プロジェクトが進行中である事を知った。早速、園長先生から詳細をお聞きし、写真なども快く提供して頂いたので、花の日礼拝などで全校生徒に報告し、それらの事を神に祈っていく事とした。また、1学期の終わりには、生徒、保護者の方々にプロジェクトへの募金の呼びかけも行った。そして、7月の終わりに、平幼稚園を訪問し、集められた募金を直接お渡しする事が出来た。幼稚園を訪問した当日は、ちょうど、福島県の平市で合宿を行っていた本校のインターアクト部の部員たちも合流し、平幼稚園の保護者の方々と共に3トンの砂を整備された砂場に入れる作業もお手伝いする事が出来た。保護者の方々からは、震災直後の事、そして今の事、また未来への希望など貴重なお話を沢山お聞きした。震災からの復興において、今回我々が出来た事は小さな事であり、これから出来る事も限られているのが現実である。しかし、イエス・キリストを土台とした「人になれ 奉仕せよ」という校訓のもとに活かされている我々は、歩みを止める事なく歩み続けたいと思う。

(関東学院中学校高等学校)





様々なボランティア活動

本校では以下の通り様々なボランティア活動が実施されました。
2012年11月～2013年8月 鉄道フェスタ江ノ電Nゲージ展、関東学院六浦小学校夏の夕べなど、東京、および神奈川の小学校やショッピングモールなど12ヶ所において、地元地域を走る鉄道ジオラマの展示と、子どもから大人まで乗車できるミニ電車の運転を実施（鉄道研究会）

- 2012年12月、2013年3月、8月 東北福祉支援ボランティア（高校生有志）
- 2013年5月 赤い羽根募金参加（高校生有志）
- 2013年6月 花の日礼拝後の施設訪問（1年生）
- 2013年6月より 関東学院六浦こども園でのボランティア（インターアクト部、高校生有志）
- 2013年8月 広島でのボランティアキャンプ（中学生有志）、関東学院・親と子のひろば「おりーぶ」夏祭りボランティア（鉄道研究会、中高生有志）

鉄道研究会は、自らの研究のみならず、鉄道模型の楽しさを多くの方に伝える活動を通して地域貢献ができることを願って12ヶ所で活動しました。外部からのご依頼も増えてきています。東北福祉支援ボランティアは、3年目に入りました。生徒たちが現地で教えていただいたことや考えたことが、それぞれの生きる場につながるのだと気づくことを期待しています。1年生の施設訪問は、花の日礼拝に合わせて皆で持ち寄った花を、近隣の福祉施設や学校にお届けしました。ボランティアキャンプは、今年度から、「共に生きる」ことを学ぶために、広島女学院のご協力のもと、広島での平和学習を組み入れました。「おりーぶ」での夏祭りには、クラブでの参加のほか、有志による参加も多くあり、今後も継続していきたいと願っています。また、3年生「福祉・ボランティア」という授業と、6年生の「ボランティア講座」という授業（いずれも選択授業）では、金沢区の社会福祉協議会と柳町ケアプラザのご協力を経て、体験学習も取り入れながら、ボランティアについて学んでいます。

それぞれの取り組みを通して、神に愛された人として、互いを大切に思う心が養われることを祈っています。

いずれも「おりーぶ」での活動

（関東学院六浦中学校・高等学校）

祈りで支える——ルワンダの佐々木和之先生 支援を通して学ぶこと

アフリカの中央部に位置する小さな国、ルワンダ。「千の丘の国」ともよばれる、美しい丘が連なる国です。そんなルワンダで1994年4月、とてもたくさんの方が虐殺されるというできごとがおきました。殺した人は見知らぬゲリラではなく、近所の人、隣りの人、村長さん、というように、ふだん顔見知り同士の殺し合いでした。生き残った人は殺した人を知っていますし、殺した人は、生き残った人に顔を見られているために報復を恐れている……人々の心は暗い闇で覆われました。佐々木和之先生はそのルワンダで人々の和解のために働いています。ルワンダの人々の心の中に残る憎しみが赦しへとかわるよう、活動しています。関東学院小学校では2005年より、佐々木先生の活動を支援しています。

佐々木先生は帰国のたびに関東学院小学校でお話をしてくださっています。2012年11月にも学校へ来ていただきました。先生をお迎えする前の準備として、全校礼拝でキリスト教委員の児童によるルワンダの国の紹介やジェノサイド（大量殺戮）のこと、佐々木先生の活動についての発表がありました。キリスト教委員は本やインターネット、佐々木先生から送られてきていた活動のお知らせ、今までキリスト教委員が発行してきた「アマホロ」（ルワンダについて書かれた新聞。ルワンダ語で「平和」の意）などから原稿をまとめて発表しました。

当日、佐々木先生のメッセージで全校礼拝をまとめたあとには、低学年、高学年に分かれてルワンダの話の聞きました。ルワンダは高地にあるため涼しいこと、野生のゴリラを見に世界中から観光客がおとずれること、……つぐないのプロジェクトのこと、ジェノサイドの被害者と加害者の間での和解が少しずつ進んでいること、などです。

児童のお祈りにはいつも、「ルワンダの佐々木先生の上にお恵みがありますように」という願いが入っています。遠く離れたルワンダですが、佐々木先生を通して近くに感じます。佐々木先生を通してルワンダで起こったことを知り、またルワンダで和解が進められていることを知りました。そして佐々木先生の活動を通して憎むのではなく赦し、受け入れることの大切さ、人に仕えるということを教えていただきました。これからも佐々木先生の和解を進める活動の上に主の導きがあるように、またルワンダの人々の上に平和があるように全校で祈っていきます。

（関東学院小学校）

（P.31～P.33に掲載した写真とその説明文は、2013年10月29日から11月21日までフォーサイト21の1階エントランス・ロビーで学院史資料室が開催した、学院史資料展「建学の精神と『校訓』2013」の記録である。また同資料は、同年12月16日、みなとみらい大ホールで開催された関東学院クリスマスコンサートの会場ロビーでも展示された。）



「人になれ 奉仕せよ」の心がここにある

私たちが支援しているカレン族のティワタ寮が今年、創立20周年を迎えました。8月に関東学院六浦小学校タイ訪問団がティワタ寮を訪問したときに、記念礼拝が行われました。

礼拝の中で、寮の創設に関わられた先生が、このようなことを話されていました。「初めは本当に小さな働きでした。小さな働き手が多くの人に支えられ、祈られて歩む中で、このように働きは神さまの祝福により豊かにされ教会も与えられました。今日は、その祈り手であり、支え手である方々が、バンコクから、そして日本から来てくださっています。こうして共に20周年をお祝いし、礼拝できることを嬉しく思います。」

そして、使徒言行録20章35節を開き、「聖書には、『受けるよりは与える方が幸いである。』と書かれています。みなさんは誰に何を与えることができますか。」

と、問いかけました。そして、このように言葉を続けました。

「私たちができるのは、隣の人に愛を与えるということです。いま隣にいる人に、です。小さなことに思えるかも知れませんが、これは神さまが最も喜ばれることなのです。」

このお話を聞いたとき、ふと納得できたことがあります。この寮の子たちは、両親と離れて生活をしているので寂しいはずですが、しかし、その生活はお互いを思いやる心にあふれ、生き生きしています。本質的な豊かさがあるように見えます。これは何故なのかということに合点がいったのです。この寮の子たちは、与えることの幸いを神さまからいただいているのだと思ったのです。この礼拝の前日、タイ訪問団の参加者が、ティワタ寮で出会って仲の良くなったお友達からカレン族の衣装をもらっていました。カレン族の正装です。この衣装を着て、この礼拝に出席していました。私たち日本人のように何枚も服があるわけではありません。衣装をプレゼントした子はなんとも嬉しそうに顔をしていました。

「人になれ 奉仕せよ」の心がここにあるように思いました。

(関東学院六浦小学校)



小さな人に思いを寄せ 大きな人のぬくもりを感じて

4月、こども園となり0～6歳児の子どもたちが生活する場となりました。日常生活の中で、異年齢の関わりがこども園のあちらこちらで生まれています。

この写真は、トイレのエアータオルで手を乾かす2歳児を助けている5歳児の写真です。そっと後ろから、優しく、小さな手を支えています。

自分がしてもらったら嬉しいことを他者にもしたいと思う心が子どもたちに芽生えます。

子どもたちは、小さな人に思いを寄せ大きな人のぬくもりを感じて・・・共に育ち合っています。

『タイの子どもたちに手紙を書こう!』

他者を意識する生活の中で、5歳児はまだ会ったこともない人に思いを馳せるようになりました。貧しくて自宅から学校に通うことができず寮生活をしているタイの子どもたちの話を聞き『タイの子どもたちに手紙を書こう!』という取り組みもその思いから始まりました。手紙には、タイの子どもたちの生活のことや好きな遊びなどに関する質問と自分達の紹介を書きました。

この写真は、手紙をタイの子どもたちに届けた時の様子です。届けに行った先生から様子を聞いて、子どもたちは喜びました。そして、その喜びは東北の平幼稚園の子どもたちの砂場を再開するためのプロジェクトへとつながってゆきます。子どもたちが作ったコロコロクッキーをお祭りで販売してその売上金を募金しようと、ただ今計画中心です。

(関東学院六浦こども園)



協同と共同、そして協働していく喜び

今年度、園から300mの所に50㎡の畑を借りて、農業経験を本格的に取り入れました。〈子ども達+保護者+教職員(含む法人内職員)+大学OBOG+港南区地域+横浜市内外の一般企業)の繋がりがもたらす実りとなっています。8月2日には第1回の夏野菜収穫パーティーを開催し、10月現在は秋ナス・ピーマンに加えて、大根の間引きを終えたところです。

ヴィゴツキー(旧ソビエトの心理学者 1896-1934)は発達とは本来社会的なものであり、子どもは生まれた時から家族、仲間、教師等、他者との交流を通して社会的に様々な事を学び、自分と他者の違いをすり合わせながら、自らの特性や個性が育つと言っています。

幼稚園や保育園は0歳～未就学児が集団で生活し、様々な関係を織りなす場です。のびのびのば園はさらに、年齢・立場を超えた人々との「共に生きる」実践の場となりました。畑の協働作業(=cooperation)だけではなく、作物を育てるという課題、目標に向かって各自が分担し、育ち具合や作物を共有することの協働学習(=collaboration)をしています。土作り、種蒔、水やり等の過程を共有し、交流、探究することで互恵的に学び合っています。

他者との相互関係を通して、新しい考えや思考方法に出会ったり、自らの固定観念を捉えなおしたり、自身のアイデアを修正したり、膨らませたり…幼い時からこのような環境に育つ子ども達です。

(関東学院のびのびの園)



学院史資料の紹介

『人ばしら』 松本善嗣 発行兼編集 昭和10年11月 172頁

元学院史資料室 主幹 三浦啓治



学院史資料の紹介『人ばしら』表紙

『人ばしら』は関東学院神学部にて在学中に召天した鈴木庸一の追悼集で、学院の同窓生10名が学院やセツルメント関係者の援助を得て刊行したものである。

庸一は1935年7月10日に農漁村伝道実習のために学院から和歌山県にある紀南労務学園に派遣され、海岸で子供たちを指導していた7月30日に土用波にさらわれて溺死した。多くの人に愛され将来を囑望されていた22歳の死である。

この追悼集には庸一と関係のあった小学校から神学部の学友、恩師、奉仕した教会、セツルメント関係者66名が追悼文を寄せている。

学院長の坂田祐も「人ばしら」と題した一文を寄せ、庸一の死は学院のために献げられた「人ばしら」で、学院はこの人柱の上に将来新日本の建設に重大な役割を果たすと庸一の死に思いをはせている。編集者も庸一の死を端的に表徴する言葉として「人ばしら」を書名とし、坂田に揮毫を依頼した。

庸一は『学院史資料室ニュース・レター No.14』で紹介した鈴木半次郎の次男として1913年7月27日に関東学院の前身である東京小石川の日本バプテスト神学校で生まれた。半次郎は博徒からクリスチャンになり、学院の賄い夫として横浜バプテスト神学校、日本バプテスト神学校、東京学院、関東学院と学院に24年間奉職し、千葉院長より怖い人と学生に怖がられてい

ながらも、神学校のお父さんと慕われ、信仰的な影響を与えた。讚美歌作家で関東学院の教員藤本伝吉による『一の半治』(鈴木半治郎伝)と題した伝記がある。

学友、恩師は庸一の印象を「真実を愛する人」、「内的苦悩の連続」、「良心的で、純真」、「死に物狂いの自己探求の生活」、「真剣さ、思想的信仰的に人に知られない苦しみをした。」と真剣に自己の人生のあり方を探求し続けたと記している。真実な生き方を求め、学友と夜を徹して議論したり、神学部をやめ労働者になり働く人の友になるべきかと悩んだ。庸一が社会事業部に入学した1931年代は農村では冷害、都市では不況による労働争議や失業と深刻な社会問題が起こり、キリスト教の福音によって社会改革を志向した学生キリスト教運動(SCM)が起こった。神学部では友井楨教授や多くの学生もこの運動に共鳴した。庸一は「社会の矛盾との戦い」、「社会科学研究への熱意」、「この世の不幸との戦い」に向かいあい、そして、「社会問題とキリスト教の統一の中に自分を見出そう」と社会の貧困問題解決のためにセツルメント活動に熱心に取り組み「セツルメントの旗手」と言われた。また、「夜半謄写版で『欠食児童を救へ』、『児童の健康相談所を作ろう』と印刷物」をつくり児童の環境改善のための活動もした。

庸一は学業も優秀で「新約も旧約も原書」で読むことが出来たほどであり、恩師から「将来伝道界に貢献」できると期待された人材であり、教会で青年会長や日曜学校主事として奉仕していた。

庸一は東京学院神学部が関東学院に併合されるに伴い府立四中から関東学院中学部に転入し、1931年4月社会事業部(神学部予科)に入学した。この年は社会事業部の授業の一環であるセツルメントの活動が活発



三ツ沢墓地にある鈴木家の墓石にある陶板の半次郎親子の写真



君一 庸木 鈴 故

学院史資料の紹介『人ばしら』鈴木庸一写真

になった年である。学院は1928年から学院設立の主旨である奉仕を实践することと、社会事業部生の実習のために学院の近くの庚耕地の谷戸でセツルメント活動を始めた。その後、庚耕地が不良住宅地域に指定され立ち退きを迫られ、活動の拠点を市内の浦島町の共同長屋の6畳の部屋に移した。セツルメント付近の百所帯は畳3枚に親子4人、電燈も2世帯が共同使用。大部分の人が日雇及び土工で極貧の状況にあった。1931年には社会事業部の渡部一高教授の発案で、全国からの募金を募りセツルメント会館「前進館」が建設された。

セツルメントは学生、教員が貧困地域の生活向上のために、その場所に拠点を設けて活動することである。学院のセツルメント活動は労働問題の講座、職業相談と斡旋、医療、児童に対する学業の補習、日曜学校、女子に裁縫、キャンプ、遠足、運動会等多岐に行われていた。セツルメント奨学金で夜学で学ぶ制度もあり、社会福祉関係者から高い評価を受けていた。

学院関係者も人的にも物質的にも積極的に応援した。宣教師のコベル先生は日曜学校で児童に基督教の話をしたり、クリスマスの行事にも参加した。渡部一高教授の花子夫人は少女に裁縫を教えたり、ご家庭に学生を招き食事を提供した。坂田院長も労働学校の卒業式に参列して労働者を励ました。

庸一は夏休み期間中「前進館」に泊り込み子供たち

の学習の指導や夏季キャンプのキャンプリーターとして活動した。キャンプは工場の煙突からでる煤煙から離れ、郊外の自然の中でテントを張り、川遊びやキャンプファイヤーと子供たちにとって最も楽しい時であった。

ある少女は、「補習学校が生まれて以来、鈴木先生は何も知らない私達のために何時も時間を正確に熱心に英語を教へ励まして下さいました。先生が御自分でタイプを打ったり、或は謄写版で刷ってくださった、アルファベットや単語スペリングなどの集を見る毎に先生の発音基礎の順序をていねいに教えていただいた事が思い浮かんで厚意の深いことを感謝しています。」とその丁寧な指導に感謝している。

庸一は教会でもセツルメントでも子供たちに慕われ、「子供たちを愛した。深く子供たちを愛した。」それは「まず、子供から教わる気持ちで接しなければいけない」と虚心に接した。庸一の死をキャンプ場で知らされた子供たちは「八月のキャンプに庸ちゃんの追悼会を開いたとき子供達は先生の死を悼んで皆な泣いた。」、「みな心をつつになって泣けた。皆の心にある鈴木先生の愛情がひたひたと大きな力でその雰囲気覆っていた。」。そして庸一の「感想文を一人残らず書いた。」。この感想文はセツルメントから『おもひで』と言う文集になり刊行された。

坂田の師内村鑑三は『後世への最大遺物』で、人はこの世に生を受け、この世に遺すことのできる最大遺物は高尚なる生涯であると述べている。半次郎、庸一親子はキリスト者としての高尚な生涯をおくり、その生き方と信仰の遺産を学院に遺していかれた。

* 「」は『人ばしら』の記述

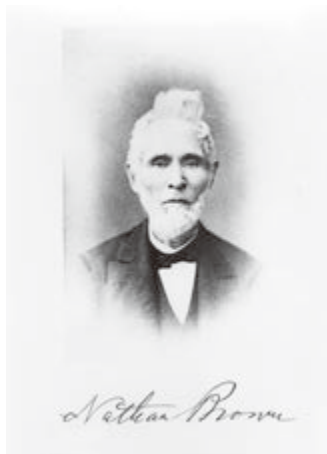


関東学院セツルメント関係教授と学生

資料・情報提供のお願い

卒業生、修了生、元教職員の皆様には学院に関する資料・情報の提供をお願いいたします。現在の教職員の皆様には各学校、各部署等で発行されました刊行物を一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようお願いいたします。(関東学院 法人事務所 学院史資料室)

ネイサン・ブラウン博士夫妻顕彰板の設置



ネイサン・ブラウン博士

2013年6月、横浜外国人墓地にあるネイサン・ブラウン博士夫妻墓碑の前に関東学院と捜真学院の連名によりネイサン・ブラウン博士夫妻顕彰板を設置した。この機会にその顕彰板を紹介すると共にネイサン・ブラウン博士本人についても記述する。また、本学院と捜真学院との関係も少しく記す。

日本におけるバプテスト初代宣教師

ネイサン・ブラウン Nathan Brown (1807～1886) は、1873 (明治6) 年、65歳のときに夫人シャーロットと来日した、アメリカ・バプテスト・ミッショナリー・ユニオン派遣の日本におけるバプテスト初代宣教師であった。

来日前は、ビルマおよびインドのアッサムで宣教師として働き、1848 (嘉永元) 年、アッサム語で『新約聖書』を完成させた。現地で令嬢と令息を病気で失い、1855 (安政2) 年、本人も健康を害して帰国した。その後本国ではリンカーン大統領に奴隷解放を建言するなど奴隷解放運動を推進した。

来日後、驚異的な語学力で日本語を習得し、1879 (明治12) 年には、日本で最初の新約聖書の全訳『志無也久世無志與』(しんやくぜんしよ) を出版した。ギリシャ語の各種写本を参照し、本文の意味を忠実に、しかも一般の人々に読まれる平易な日本語に訳出した。最晩年にブラウンは、この聖書の改訂を A・A・ベンネット (関東学院創立者、前身「横浜バプテスト神学校」初代校長) に依頼し、彼によって最終改訂版が出版された。横浜外国人墓地の墓碑には“God bless the Japanese.” と刻まれている。この言葉は、外国人が生涯と死を通して示し、日本人のために捧げた祈りである。彼の祈りは、学院の校訓「人になれ 奉仕せよ」に通じているのである。

1884 (明治17) 年には、関東学院の源流である横浜バプテスト神学校の設立会議を主宰し、同年山手に開校以降、召天時まで支援したことから、関東学院にお

いては学祖と呼ばれる。

横浜第一浸礼教会(現在は「日本バプテスト横浜教会」と改称—中区寿町、日本で最初のバプテスト教会で、日本で2番目のプロテスタント教会)の初代牧師はブラウン、二代目牧師はベンネットである。



1945 (昭和20) 年5月29日、ネイサン・ブラウン博士夫妻墓碑日、横浜大空襲のため、関東学院は多くの建物や設備を焼失した。神奈川中丸にあった捜真女学校校舎も全焼した。関東大震災のときは捜真女学校は焼け残っていたので、関東学院中学部は校舎を借りて午後から授業を継続した。第一回卒業式も捜真女学校講堂で行い無事卒業生を送り出したことがある。横浜大空襲の際には、捜真女学校に校舎の使用を許可し、焼け残った中学部本館 (現在の旧中学校本館) で、捜真女学校、関東学院中学部、同航空工業専門学校の三部授業を続けた。

捜真学院は、関東学院の姉妹校である。同じアメリカ・バプテスト・ミッショナリーから派遣された宣教師を創立者 (捜真学院: シャーロット・ブラウン、関東学院: A・A・ベンネット) に持つからである。その深い関係はそれだけではない。当時、関東学院初代学院長であった坂田祐が、捜真学院の校長を1932 (昭和7年) から1946 (昭和21) 年まで兼任したことがあるからである。



墓碑左手に設置されたネイサン・ブラウン博士夫妻顕彰板 (瀬沼達也編著)

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第17号 発行日 2014(平成26)年2月28日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 『関東学院学院史資料室ニュース・レター』 編集委員会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2932